

1. 激動の青年期

群雄割拠する戦国時代もようやく終わろうとしていた永禄5年(1562)1月12日、尾張国愛知郡荒子(名古屋市)の前田利家に待望の長男が生まれました。後の加賀百万石の二代目・前田利長です。幼名は犬千代、後に孫四郎、初名は利勝と名乗りました。

織田信長に仕えた父と同じく武勇に優れ、数々の戦功を立てます。天正9年(1581)には、越前府中(武生市)に3万石余の城主となり、信長の五女と結婚。同11年(1583)の賤ヶ岳の戦いでは柴田勝家につきましたが、羽柴(豊臣)秀吉と和を結んで、加賀松任で4万石の城主となります。翌年、末森城の合戦では父利家とともに佐々成政を少数の兵力で敗り、その功績により越中三郡(砺波・射水・婦負)を賜り、守山城に入り、前田氏による越中支配の基礎を築きました。



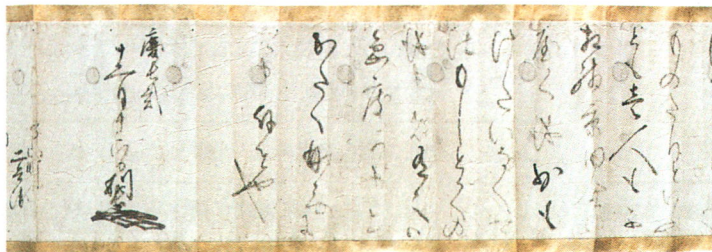
前田利長公画像(部分)
利長夫人ゆかりの長光寺蔵(高岡市石堤)

2. 英断の壮年期

その後も利長は九州征伐、小田原攻めなど秀吉の部将として戦い、慶長2年(1597)富山に移り、翌年、利家から家督を譲り受けて、加賀前田家二代当主となり金沢城に入りました。利長37才の時です。

この後、秀吉・利家が相次いで亡くなると、利長は豊臣家の柱石として注目されますが、徳川家康の天下を悟り、母を江戸へ人質に出すなど、家康に完全に服従する姿勢を貫きました。

そして天下分け目の関ヶ原の戦いで徳川方として北陸方面で奮戦し、その功により能登と加賀二郡の40万石が加増され、ここに加越能三国120万石の大々名として地位を確立しました。



前田利長判物(部分、慶長2年・1597)
当館蔵



国宝・瑞龍寺(仏殿)

3. 百万石を死守した晩年

慶長6年(1601)、利長は徳川秀忠の二女珠姫と利常(異母弟)の結婚をとりまとめ、その翌年には徳川の重臣・本多正信の二男政重を国家老として迎えるなど徳川との結束を強め、前田家存続のため盤石の構えをとっていきます。

慶長10年(1605)、利長は44才で富山に隠居し、藩主を利常に譲り、その治世を後見します。同14年(1609)、富山大火により、新たに射水郡関野に築城(伝・高山右近設計)して「高岡」と名付け、町を開きました。

晩年はひたすら徳川に対して恭順の姿勢を示しつつ、同19年(1614)、高岡でその波瀾に満ちた生涯を閉じました。享年は53才。

利長は利常により造営された国宝・瑞龍寺に菩提を弔われ、高岡の地で安らかに眠っています。

前田利長の生涯

年 代	年 齢	主 な 出 来 事
永禄 5年 (1562)	0	1月12日、尾張国愛知郡荒子城(現名古屋市中川区)に前田利家の嫡男として誕生。 幼名犬千代、のちに孫四郎、初名は利勝。のち利長と改める。
天正 9年 (1581)	20	12月、織田信長の五女永姫(のちに玉泉院)と結婚。 越前府中(現越前市)に封ぜられ、3万3千石を与えられる。
11年 (1583)	22	4月、賤ヶ岳の戦い。松任に転封され4万石を与えられる。
12年 (1584)	23	9月、能登末森城の合戦。少数の兵で佐々成政を敗る。
13年 (1585)	24	8月、秀吉軍、越中の成政征伐。守山に転封され、成政旧領の越中三郡(砺波・射水・婦負)を拝領。 閏8月、勝興寺に制札。11月、従五位下に叙せられる。
15年 (1587)	26	4月、秀吉の九州征伐に従い、豊前(大分県) 巖石城を攻め戦功を立てる。
17年 (1589)	28	利勝を利長と改名。
18年 (1590)	29	秀吉の小田原征伐に従い、上野・武蔵・相模など各地の諸城を陥れる。
文禄元年 (1592)	31	正月、聚楽第行幸に陪席。春、文禄の役(朝鮮出兵)。利家、肥前(福岡県) 名護屋に在陣。 利長は留守し軍需品の調達にあたる。金沢城を修築。
慶長 2年 (1597)	36	10月、越中の本願寺の末寺・門徒に制札。新川郡富山城に移る。
3年 (1598)	37	4月20日、利家退老して家督を譲り受け、加賀前田家二代当主となる。 従三位権中納言に叙せられる。8月、秀吉死去、秀頼の補佐役(傳役)になる。
4年 (1599)	38	閏3月3日、利家死去。豊臣家五大老に列し、大坂で秀頼を補佐。
5年 (1600)	39	5月、母芳春院人質として江戸へ下る。9月、関ヶ原の戦い。 徳川方(東軍)に属し、家康より加越能三国120万石を与えられる。
6年 (1601)	40	9月、徳川秀忠の娘・珠姫と異母弟・利常結婚。利常を跡継ぎと定める。
10年 (1605)	44	4月、利常と共に家康に謁する。6月、利常に家督を譲り、新川郡22万石を養老領として富山城で隠居。 12月、越中の総検地をする。
14年 (1609)	48	3月、富山大火。魚津城に移る。5月、射水郡関野に高山右近の縄張り(設計)で築城、突貫工事開始。 木町を設置。9月13日、関野を高岡と改め、未完成の高岡城へ入城。高岡開町。
15年 (1610)	49	3月、癰(悪性の腫物)を病む。
16年 (1611)	50	砺波郡西部金屋(現高岡市戸出)の鑄物師7人が諸役免除の拝領地(現高岡市金屋町)に招聘される(翌年さらに3人を招聘)。 5月、遺言を作る。12月、10万石と家臣数十人を本藩へ返す。新川郡の亀谷銀山を開き、花降銀を鑄造。
18年 (1613)	52	病、重くなる。徳川と豊臣対立。秀頼の誘いを断る。
19年 (1614)	53	病ますます重くなり「我死なば、すなわち天下自ら統一して太平ならん」と言い残し、5月20日、高岡城において死去。 高岡の法円寺(後の瑞龍寺)に葬り繁久寺を再興して守らせる。法名は「瑞龍院殿聖山英賢大居士」。 正二位権大納言を贈られる。
元和元年 (1615)		豊臣氏滅亡。一国一城の令により、高岡城廃城。家臣団金沢へ引き上げる。
6年 (1620)		利常、高岡町人に転出禁止令を出す。
正保 3年 (1646)		利常、利長33回忌にあたり高岡に墓域1万坪に及ぶ「前田利長墓所」(国史跡)を造営する。
寛文 3年 (1663)		利長50回忌にあたり正保2年(1645)より建築中の瑞龍寺が竣工する。

高岡城

(1) 高岡城築城

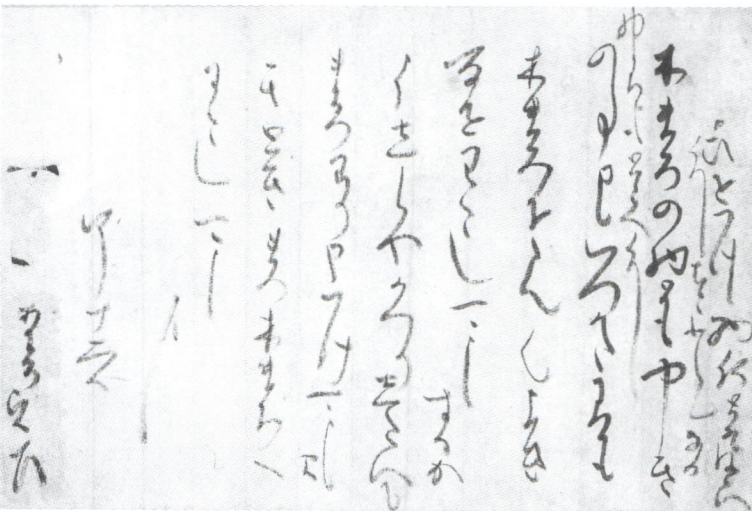
加賀前田家2代当主・前田利長は、慶長10年(1605)隠居して富山城にいましたが、同14年(1609)3月下旬の大火により城を失いました。利長はいったん魚津城へ避難し、4月6日付で駿府(静岡市)の大御所・徳川家康と、江戸の将軍・徳川秀忠から関野(高岡の旧名)での築城許可を得ました。関野は加賀藩領(現富山・石川県)のほぼ中心にあり、小矢部川や当時大河であった千保川がつくった広大な沼沢地でした。高岡城はその中に浮かぶ高岡台地(標高約15m)の北隅に築られました。

高岡城は高山右近が縄張(設計)したと伝わります。しかし、最近の研究では利長自らが縄張をした可能性が指摘されています。築城及び城下町造成に関する利長の書状が約30通も残っており、利長自らが積極的に指示したことが分かっています。そのほとんどが督促状であり、利長がいかに築城を急がせていたかがえます。

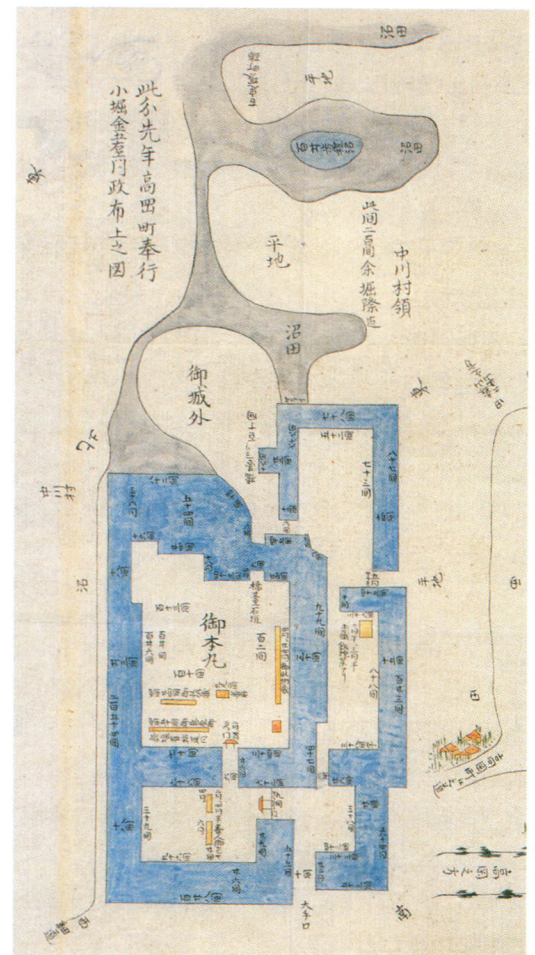
当時は未だ大坂に豊臣家があり、徳川家は完全に天下を統一したわけではありませんでした。利長は父利家の跡を受け豊臣家五大老、及び豊臣秀頼の傳役でありながら、いち早く徳川家に味方しました。母芳春院(まつ)を江戸へ人質に出し、後継ぎの利常と家康の孫娘を結婚させ、加賀本藩は完全に徳川大名としましたが、自らは一線を引いて微妙な立場を保持し続けました。そこで、自分の有力な拠点を早急に持つ必要があったのです。

高岡築城の経緯をみていきます。慶長14年4月中旬に高岡最初の町となる「木町」を小矢部川と千保川の合流地点に築いて物資の揚陸基地としました。また同時に城下町の建設も進めています。5月中旬には城の地鎮祭を行っておりこれ以降、普請(土木工事)が本格化したと思われます。領内から約1万人(推定)の人員を動員して突貫工事で進められ、9月初旬には仕上げの段階になったといえます。

そして慶長14年9月13日、利長は主立つ家臣434名を引き連れて入城を果たしました。しかし5日後に二の丸の門や隅櫓(2棟)の増築を命じており、また入城3年後にも書院廊下用の畳の調達を命じているなど、城はしばらく未完成であったと思われます。



「前田利長書状」慶長14年(1609)4月12日付(木町神社蔵、高岡市指定文化財) 駿河(家康)よりの使者が帰り次第に最初に木町の町割を命じている。



「高岡城之図」(小堀図部分) 江戸後期 (金沢市立玉川図書館近世史料館蔵)



本丸礎石検出状況 平成23年 高岡市教育委員会提供



貫土橋(朝陽橋南橋詰) 栗石検出状況 平成23年 高岡市教育委員会提供

(2) 高岡城の規模・構造

高岡城跡は測量調査によれば、長さ 648m、幅 416.5m の規模を持っています。面積は約 21.8 万 m² (東京ドームの約 4.5 倍) で、そのうち 37% が水堀で占められています。縄張形式は、本丸から二の丸、鍛冶丸、明丸、三の丸、現「梅林」、御城外 (現小竹藪) という 7 つの郭 (城内の区画) を土橋で繋げる「連続馬出」であり、非常に高い防御力をもっています。現在、その郭の形状や水堀のほぼ全てが残っており、高岡城は平成 18 年 2 月、県内で唯一「日本百名城」に認定され、また平成 27 年 3 月 10 日には国史跡に指定されました。

発掘調査により城域全体に手厚い地盤造成の痕跡や、本丸には幅 50m 以上の規模をもつ御殿の存在などが発見されました。各種史料から、本丸には材木蔵・番所・鷹部屋、「貫土橋」(車橋) や、二の丸に鈴木権之助屋敷と門と隅櫓 2 棟、三の丸には今枝民部直恒の屋敷があったことなどが記されています。

(3) 高岡城跡、3 度の危機

入城翌年に病を発した利長の容態は、徳川・豊臣の関係と同じく年々悪化しました。そして慶長 19 年 (1614) 5 月 20 日、利長は城内にて 53 歳で死去しました。同年冬の大坂冬の陣の際は稲垣与右衛門が、翌年の大坂夏の陣には、岡嶋一吉らが高岡城に配置されました。そして戦後、幕府により「一国一城の令」が発せられ、高岡城は廃城となっていました。

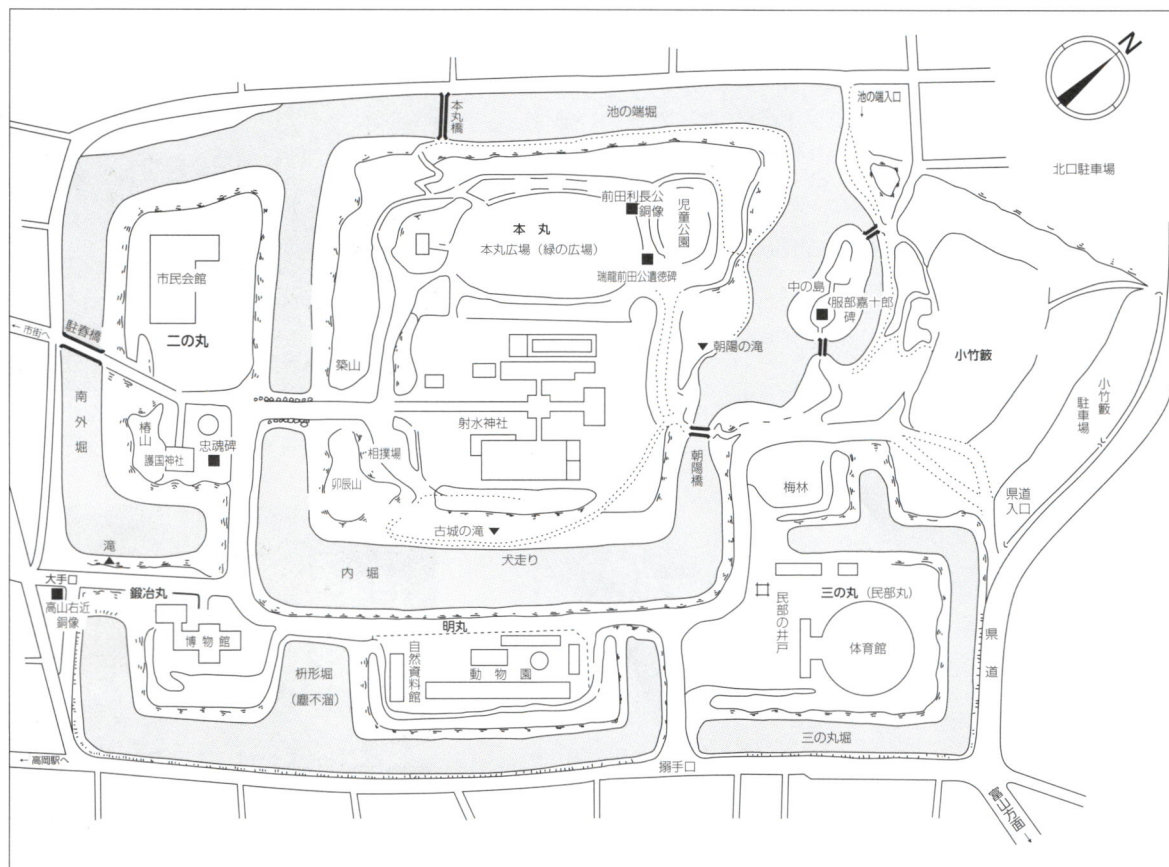
しかし、利長の跡を受けた 3 代当主・前田利常は、高岡城の水堀を埋め立てませんでした。そして米や塩などの蔵を設置し、番人をおいて、一般の出入りを禁止しました。つまり利常は、城の実質的価値である壘 (郭) と堀を保存して、その潜在能力を保持したのです。

江戸時代はそのまま保存されましたが、明治初期に 2 度目の危機がありました。城跡が民間に払い下げられたのです。しかし、落札者は開墾などをしなかったといえます。これは町民の間で高まった城跡保存の世論によるものと思われます。築城以来 260 余年間、「古御城」と呼び誇りとしていた城跡が破壊され、失われるのを何とか防ごうとする町民の思いが察せられます。そして当時の第 17 大区区長の服部嘉十郎ら有志は県に城跡の公園指定請願書を提出、明治 8 年 (1875) 7 月 4 日、城跡は「高岡公園」として認定され、無事に保存されました。その時に奔走した鳥山敬二郎は大正期の市長時代に公園整備に尽力しました。

そして 3 度目の危機といえる昭和 30 ~ 40 年代の高度経済成長期には、全国の多くの城跡が「開発」という名で破壊が行われていますが、高岡市は城跡を保存しました。

高岡城は高岡の発祥を示す貴重な史跡で、高岡のアイデンティティーといえます。今後も我々は、利長・利常、そして高岡市民たちの長きにわたる思いを尊重し、守り伝えていかねばならないと思います。

高岡古城公園図



高岡のあゆみ

高岡市立博物館



「桜谷古墳群」(高岡市太田)

○高岡のあけぼの

高岡では、今から約1万年前頃から人々の生活が始まりました。高岡古城公園の小竹藪でも、縄文時代中期後半から後期(4500～3000年前)までに営まれた小竹藪遺跡が確認されています。当時はまだ自然の恵みをたよとする採集・狩猟生活が中心だったようです。

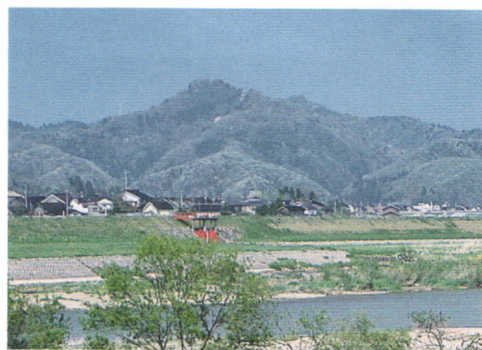
その後、日本列島には弥生文化が伝来します。最初にこの文化が伝来したのは九州地方でしたが、石塚遺跡などにもみられるように、弥生時代の中頃には高岡にもこの文化が伝播してきます。

稲作は、計画的な栽培や貯蔵を可能とするものでしたが、このことはその後の日本の社会を大きく変えていきます。周辺地域を統括する首長を誕生させ、特別な墳墓も造られるようになります。その傾向は時代と

ともにさらに増大し、やがて古墳やクニが形成されます。高岡市内にも、桜谷古墳群をはじめとする多くの古墳群が造営されたほか、「伊弥頭国造」などの豪族が出現したとされます。

奈良時代には、高岡市の伏木に国府や国分寺などが造営され、高岡は越中の政治・文化の中心地となりました。歌人として著名な大伴家持(718頃～785)も国守としてこの地を訪れており、高岡で詠んだ多くの歌は『万葉集』に収められています。当時の国家事業であった東大寺領荘園の造営も家持の時代に行われますが、市域には須加荘・榎田荘・鳴戸荘などがおかれたものと考えられます。

中世の高岡は戦乱の時代でした。市内には源義仲・義経や、後醍醐天皇の二皇子(恒性・宗良)らゆかりの史跡があります。戦国時代は国人(石黒氏等)、一向一揆、守護代神保氏らのほか、能登畠山氏、越後長尾(上杉)氏らの勢力が、守山城などを舞台に激しく争いました。そんな波乱にみちた時代も、前田氏の所領となって以降は、徐々に平穏を取り戻していきます。



「守山城跡」(二上山)

○城下町から商工の町へ



「前田利長画像」(金屋町本)

高岡の町は、慶長14年(1609)9月13日、前田利長(1562～1614)により開けられました。利長は加賀百万石の祖・前田利家の長男として生まれ、越前府中・加賀松任を経て、越中守山・富山・金沢・富山と拠点を移しながら、織田・豊臣・徳川と主をかえつつ、戦国乱世を生き抜いてきました。

高岡城は標高15m前後の関野台地に築かれた平城です。面積約21万²m(東京ドームの約4.5倍)のうち3割が水濠を占めます。7つの郭と土橋からなる「重ね馬出」形式の縄張り(縄張り)はほぼ全てが保存され、県内で唯一「日本100名城」に認定されています。城の南西側の台地上(枅形の内)には武家屋敷が、台地下の西から北にかけては町人地が開けられました。利長は、多数の商人のほか、鋳物師などの職人も招き、町政や農政にも尽力しました。しかし、開町からわずか5年後の慶長19年(1614)5月20日に、利長は53才でこの世を去ります。さらに、その翌年に下された「一国一城令」により高岡城は廃城となり、まず武士たちが、つづいて町民たちが高岡を離れ、町は一時の勢いを失いかけていきました。

しかし、利長の遺志を継いだ3代前田利常^{としつね}は、高岡を城下町から商工の町へと変えていきました。この改革は今日の高岡の発展の基礎となり、現代にも息づいています。

利常は、町政組織の改善をはじめ、寛永5～6年(1628～29)には北陸道を高岡町内で改変しました。また、御荷物宿^{おにもつやど}・魚問屋^{こめぐら}・塩問屋^{おつめしおぐら}の創設をはじめ、城址への御収納^{ごしゅうのう}米蔵と御詰塩蔵の設置や、高岡を麻布の集散地とするなど、様々な殖産興業政策を実施していきます。

さらに加賀藩は、高岡に藩で唯一の綿市場を設置し専売権を与えました。また、材木・肥料・雑穀などの集散に便宜をはかるなど、商業の保護や育成につとめ、高岡は商工の町として発展を遂げ、やがて“百万石の台所”と言えるほどの経済都市に成長していきます。

幕末の頃、高岡の人口は3万人前後にまで達していました。その生活必需品を供給するため、当地では小売業も繁盛していましたが、高岡商人の根幹は、加賀藩全域の商品の流通を担当する問屋業でした。



「前田利常画像」(那谷寺本)

○近代化へのあゆみ



「高岡米穀取引所」(高岡市御馬出町)

明治になると、すぐさま高岡商人は、綿・布・肥料などを扱う商社を次々と設立しますが、米市場の設立は、当時の石川県(現在の富山県を含む)や金沢商人の反対で果たせずにいました。

しかし、明治16年(1883)、富山県が石川県から分離独立をすると、高岡は経済の中心となることを目指し、2年後には高岡米商會所(後に高岡米穀取引所と改称)を創設します。これは江戸時代以来の悲願を果たしたことを意味します。

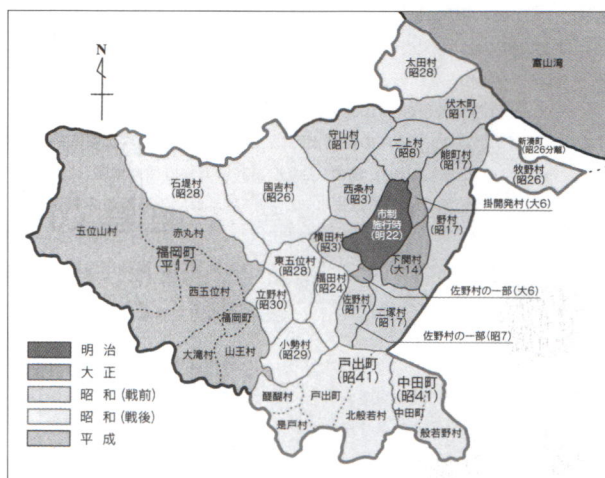
高岡経済の中心地であった「山町筋」の豪商らは、明治22年に高岡銀行を、同28年には高岡共立銀行と高岡貯金銀行を設立します。また、同26年には日本海側初の紡績工場「高岡紡績(株)」を設立するなど、高岡の近代化に尽くしました。

なお、同年には戸出物産合資会社(綿織物業)が設立されるなど、近代化の波は周辺にも広がりをみせます。また、この頃には“伏木近代化の父”^{ふしき}とうたわれた藤井能三^{のうそう}らが、中越鉄道^{ちゅうえつ}(現JR城端線・氷見線)の設立に尽力し、官設北陸鉄道(現JR北陸本線)と競って線路を延ばしていましたが、これらは富山県西部の産業や経済をさらに発展させてゆく原動力となりました。明治33年(1900)6月には、市街地の約6割を焼き尽くす大火が起こります。しかし、山町筋は防火に優れた土蔵造りの町並みに姿を変えて復興を遂げ、高岡の産業や経済は、その後もますます発展をしていきました。

○高岡市の領域の進展

明治4年(1871)の廃藩置県を皮切りに、高岡町の所管は目まぐるしく変わっていきいますが、明治22年(1889)4月1日の「市制・町村制」の施行にともない、全国31市の一つとして「高岡市」が誕生します。ちなみに、当時の人口は29,292人でした。また、このとき県庁所在地以外で市となった都市は、高岡のほかは5都市にすぎませんでした。

誕生当時の高岡市域は、藩政期以来の高岡町などを基礎とする小さなものでしたが、その後は統合や編入を経て徐々に市域を拡大していきます。そして、平成17年11月1日の旧福岡町との合併により、現在に至っています。



「高岡市域の移り変わり」

町名は歴史をひもとくパスワード

高岡市立博物館

I 高岡の文化遺産をめぐる市民運動

平成 23 年、高岡市は県内初の「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律」に基づく「歴史都市」に認定された。

本市では同 18 年、高岡商工会議所が中心となって、「近世高岡の文化遺産群」を世界遺産にとの一大市民運動が巻き起こった。残念ながら遺産登録への道は険しかったが、同 21 年、高岡開町 400 年祭が市民総ぐるみで盛り上った。地域の歴史に興味と感心が湧き起こり、博物館へも市内外からの来館者で大いに賑わった。

郷土学習熱も冷めやらぬ同 23 年、「歴史都市」の認定を機に、またもや同会議所により、旧町名を復活し歴史都市高岡に磨きをかけようとの運動が起きてきた。当面は復活を目指す対象地域を、江戸時代に成立した高岡町で、「住居表示に関する法律」（昭和 37 年公布）により町名を変更した町に限定している。

II 地名は無形の文化遺産

地名にはいろいろな意味が隠されている。地形や土壤、災害、人名、古語などが、その土地の状況や人との関わりのなかから生まれ、地名として名付けられた。人々はその場所を他と区別し、それを共同体で認識しあうために最も分かりやすい名を選んだ。

江戸期、高岡町に付けられた町名も同様で、一つひとつに個別の意味が籠められている。町名には祖先から引き継いできた「共同感情をゆすぶる力」がある。その名に触れるだけで 400 年余り昔のわが町のご先祖様をグッと身近に感じることができる。

III 江戸期 高岡町の成立と町名の由来

1 開町 利長在城時の町々

加賀藩二代当主前田利長は、慶長 10 年（1605）、富山城

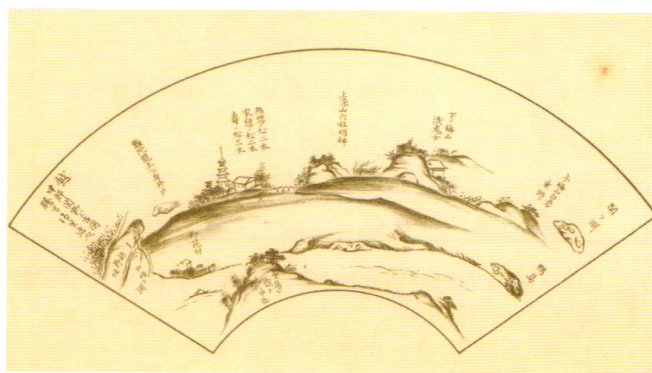
に隠居した。ところが 4 年後の同 14 年 3 月 18 日、町家からの出火で富山城と町を焼失した。利長は魚津城へ避難し、幕府と駿府城にいた徳川家康に関野（高岡）での築城の許可を求める使者を派遣し、4 月 6 日許可を得た。

同 12 日高岡城及び城下町の建設物資の陸揚地として木町建設を、16 日には木材を五箇山から伐り出すよう指示し、加越能三州より物資と人員を集めて工事を開始した。利長は魚津城から築城と開町の指示を出し、着工からわずか 5 ヶ月、9 月 13 日に高岡へ入城。武士とその家来たち 562 名を伴った。また「関野」を『詩経』の「鳳凰鳴矣于彼高岡」により、高岡と改称した。

町人たちは加越能三州をはじめ尾張、山城、近江、信濃等から 630 名余が集まった。開町時にできた町は本町といい、土地を無償とし、地代もとらなかった。

『高岡町由緒聞書』『高岡市史』等によると、本町 35 町のうち射水郡出身者が 23%、砺波郡が 17%、婦負郡 6%、新川郡 3%である。越中国内の人々が 49%を占め、17%が越中以外、不明が 34%である。

出身地が分かる町数を 100%とすると、射水郡 35%、砺波郡 26%、婦負郡 9%、新川郡 4%、越中以外 26%である。越中から 74%の人々が来たことになる。

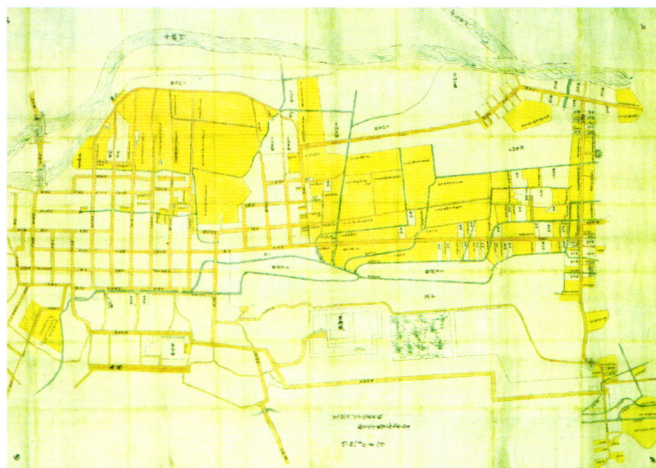


「関野之古図」（高岡開町以前の図）高岡市立中央図書館所蔵

① 成立順を表す町名

一番町……高岡第一番にできた町で、射水郡津幡江村（現・射水市）の庄左衛門、作道屋助次郎が商売を始めた。

二番町……二番目にできた町で答野島村（現・国吉）の百姓平六が米屋を営んだ。



「明和8年(1771)製高岡町図」 高岡市立中央図書館所蔵

三番町……氷見屋長助が荒物屋、田子屋権五郎が肴屋、角屋六兵衛が油小売・蠟燭屋を始めた。

② 旧城下を表す町名

守山町……守山城の麓の守山村から、17軒が引越した。久兵衛は太物屋、千左衛門は蠟燭・油元結、権三郎は米屋を営んだ。

木舟町……木舟城（現・高岡市福岡町木舟）のあった木舟村から、善右衛門、宗三郎、四郎兵衛、三六、源兵衛など20余軒が引越した。故郷が恋しく木舟町とした。

③ 職業を表す町名

金屋町……砺波郡西部金屋村から鋳物師が召し寄せられた。（出身地も表す）

風呂屋町……近在から呼び寄せられた人々が風呂屋を始めた。

利屋町……山城より藤原源太正郎という刀鍛冶が召し寄せられた。当初は研屋町と書いた。

博労畳町……砺波郡の戸出・石丸・徳市などより馬喰が移転してきた馬喰町と、久津呂屋与平、柳田屋清八など氷見在より引越し畳屋を始めた畳町とでできた。当初は馬喰畳町と書いた。

旅籠町……富山四方、放生津辺りから移り宿屋を始めた。

檜物屋町……新川郡大場村の百姓庄左衛門が引き移り、指物屋を始めたので、当初は指物屋町といていた。のち塗り物が盛んになり檜物屋町に改称した。

桶屋町……桶屋が始めて開いた。桶屋町が発展し人口が増えたため、正徳3年(1713)に下桶屋町が分離して成立した。

油町……油屋が多く居住した。

千木屋町……慶長年間、千保川の川幅が広く底も深かった。

当町は材木の集散地になり千木屋町と称するようになった。

木町……利長は築城と城下町建設の資材を調達するため、富山木町の人々を呼び寄せ、千保川と小矢部川の合流点の右岸に木町を作った。当町は運漕と材木・薪炭商売の特権を与えられた。

土器町……当町から古定塚にいたる街道沿いに多くの寺院が配置され、侍屋敷があった。町名は製陶業者がいたからと伝える。

白銀町……白銀師が居住したと伝える。

④ 人名による町名

源平板屋町……紀州長岡より源平という者一門が引き移り、紙屋、太物屋、小間物屋、仕立屋、張物屋などを始めた源平町と、放生津より六右衛門が引き移り、屋根板を売り始めた板屋町で、源平板屋町になった。人名と職業の複合により町名になった。

鴨島町……加茂嶋七郎の屋敷があった。七郎は寿永年間(1182 - 4)、関野の南部台地に住んでおり、この地の地頭であったという。

梶原渕町……高岡町が建設されたころ、千保川が庄川の本流で、川幅が広く、特にこの辺りは深い淵が所々にあって流れが渦をなしていた。この河岸へ梶原源太（鎌倉時代の武将景時の子の景季）の子孫を名乗る五郎平という者がやってきて一家を構えた。人名と地形の複合により町名になった。

⑤ 地形による町名

堀上町……堀は十七ヶ（庄方）用水のことで、当町は高岡町を通るこの用水の上にあたる。

片原町……十七ヶ（庄方）用水の北西側が町屋で、片側は武家屋敷裏の林野草原であった。

川原上町……慶長年間に旧城下（守山城）から土器町（現・大坪町）へ移住した商工人が火災に遭い、移転して川原町を開いた。魚商、肥料商、干物商、塩売捌き商などが住んだ。

下川原町……千保川沿いにある、川原町の下手になる。

坂下町……越後長岡から後藤孫之進という武士がやってきて、武道指南をしたのが始まりである。御旅屋台地から丘陵地帯に下がる場所に位置することから、坂下町と名付けられた。台地のあたりを坂高町と呼んでいた時期もあった。

⑥ 軍事施設による町名

御馬出町……越前より吉十郎という者がきて馬具の商売を始め、武具商人と武芸指南の町へと発展した。江戸期は大馬出町とも記された。現・関野神社の一の鳥居付近は枳形

(侍を集めて人数をはかり出す所)と呼ばれる方形の空き地で、攻め入る敵の勢いを鈍らせ、あるいは繰り出す兵士や軍馬の数をつかむ城郭の重要地であった。枡形の北には土居が築かれ、さらにその下には駒留と称する柵が設けられていた。だから枡形から真っ直ぐ北に伸びる当町は、軍馬が繰り出す大きな「馬出」だった。

小馬出町……現・大仏前に近い坂下町の上の方に御馬出町の枡形よりも小さな枡形があった。その下は崖になって林が茂り格好の「馬出」だった。信州上田の安元四郎左衛門が諸芸指南を始め、当初は信濃町とあった。

⑦ その他

通町……この町を通して他の街道に連結する交通の結節点であった。

袋町……町の形が箸箱のように細長く、入り口が1ヶ所しかない袋小路のような状態だった。

二丁町……はじめ二時町と称したが、天和元年(1681)、二丁町に改めた。

開発町……高岡城を築くとき、築城用材木などを運搬する人々が居住する町として早くから成立した。開町当初は大掛町と称したが、寛永20年(1643)、開発町に改称した。開発木町と呼んだこともあった。

定塚町……中川の熊野神社の祖先である利長坊という山伏が、中川村の小高い山(ポンポン山)に入定し、その塚があったことによる。利長坊は「私の死後百年ののち、この世に現れ、この世を救ってみせる」と言い残した。利長は自らをその再生と信じ、この塚を保護したという。

高岡城の廃城後、寛永5~6年(1628~9)頃、高岡町を通る北陸道の東半分が付け替えられることになった。小馬出町から平米町へ続いていたのが、坂下町へと右折し坂を上がって、現大仏の前で左折し、古城の大手前を経て大野へ抜ける道へと変更された。

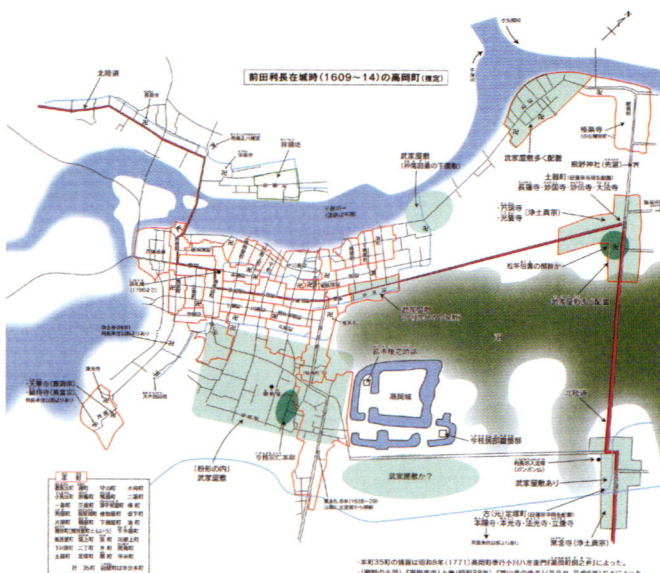
このため、大手前(常念寺あと付近)の濠や土塁が見透かされることを憚り、定塚町(現・古定塚町)の民家の一部を下関村領へ移転させ、また砺波郡蓮沼村から蓮沼屋五兵衛などの百姓が引っ越して新たに定塚町ができた。これを荒屋(新町とも)と呼んでいたが、いつの頃からかこちらを定塚町、元の定塚町を古定塚町というようになった。

関町……高岡町の開町によって旧地名の「関野」が無くなることを惜しんで、利長が命名したと伝える。

平米町……砺波郡常国村(現・中田)の百姓長兵衛などが引っ越して開いたという。当初、平吹町と称したが、天和元年(1681)、平米町に改称。その理由は万治年間(1658~

61)に役夫(公役に使役される人夫)にできるものが多く、その代価に与えられる米をお平米といったことに因むという。

横町……町名の由来は伝わっていない。



「前田利長在城時(1609~14)の高岡町(推定)」
高岡市立博物館ガイドブック「高岡ものがたり」所収

2 利常以降の町の発展

利長死去の翌年、一国一城令により、高岡城は廃城となった。家臣団が金沢へ去り高岡町は急速に寂れ始めた。三代利常は高岡を城下町から商工業の町へと再生させるため、元和6年(1620)町人の他所転出を禁じた。さらに町政の組織を改善し、布御印押人をおき、魚問屋・塩問屋などを創設した。こうして商工業が繁栄し人口が増加するとともに、藩士の屋敷跡や百姓地を借りて、徐々に町が拡がりこれらを地子町といった。当初の本町35町に地子町27町が増え、幕末には合計62町となった。

3 地子町の町名由来

地子木町…最初にできた地子町で寛永17年(1640)の成立。木町が物資の集散地として栄え、人口が増大し木町の南にできた。開発町の九右衛門がはじめて来住したと伝える。

横田新町…正保2年(1645)古定塚から移転した職人が、横田村を請地してできた。

白銀後町……白銀町の南東に続く町。町の南東部に足軽屋敷があり、承応の頃(1652~5)からこの地区を足軽町といった。寛政(1789~1801)の頃には鉄砲町と通称された。

大工町・大工中町・大鋸屋町……承応・明暦の頃（1652～8）、利長の菩提寺・瑞龍寺を建立する際に、大工や大鋸屋等が居住して町名になったという。大工町は当初、大木町と称していた。

横田町……寛文6年（1666）、高岡町に近く、北陸街道沿いの横田村に町人が多く住むようになってできた。

上川原町…川原町の上手になる。魚商、運送業、桶屋、荒物屋等がいた。

中川原町…上川原町と下川原町の間にあるので中川原町。魚、干物、肥料商、海産物商等がいた。

一番新町…一番にできた新町で射水郡江尻村の藤兵衛らによって開かれた。二番新町とともに四十物町とも呼ばれた。二番新町…二番町某の分家の次郎九郎が糶屋（米の小売商）を始め、発展したという。塩干物の干し場に恵まれ、生魚のほか塩干魚を取り扱う商人が集中した。

橋番町……廃城後、藩臣の屋敷跡地に町立てされた。横田橋（千保川）と横田小橋（中島川）の掃除と諸事取締りをする橋番人が居住した。

横川原町……享保5年（1720）、小馬出町と下川原町の一部を割いて成立。花街となり天保（1830～）から幕末期にかけて栄え、幕末には15軒の楼が連なっていた。

立横町……道路が曲がり尺のように直角に縦横になっているのでつけられたという。

片原中島町……宝暦4年（1754）、鴨島村の一部を請地して町立てされた。町名は片原町に隣接し、同町の中央を流れる庄方用水が、町の西端で分岐し、町は二流れの用水に挟まれ、中の島の地形であった。

中島町……庄川の改修により千保川の水量が激減し、横田町と橋番町の間の川のなかに中の島が生じたという。当町は横田村より請地し、宝暦4年（1754）、横田村の横田屋甚右衛門が引っ越して始まったと伝える。

片原横町……廃城後、藩臣の屋敷跡地と鴨島村からの請地を併せて町立てされた。片原町の横に隣接する。

蓮光寺門前……蓮光寺の門前にできたことによる。高岡町には門前町が2町あり、当町と教恩寺下町であった。蓮光寺は井波瑞泉寺（親鸞聖人の連枝寺で大谷派）の下寺で、教恩寺は伏木勝興寺（連枝寺で本願寺派）の下寺であった。教恩寺下町……教恩寺の西側にあった。

神主町……山王社、熊野社などの神官が居住した。当町と上関村にまたがる一区画に高岡関野神社の前身の熊野社・稲荷社・加久弥社と、八幡社、山王社等が集まっていた。

鴨島下町…鴨島町の南西にできた町。

母衣町……縄手中町・縄手下町とともに、射水郡領家開発村（開発村）領を請地して、文政7年（1824）に町立てされ、3町合わせて縄手三町と称した。母衣町の由来には、

i 母衣徒士の邸宅があった

ii 母衣を作る職人がいた

iii 関野神社の祭礼の際に母衣武者行列が休憩し、隊列を直して帰る習わしがあった

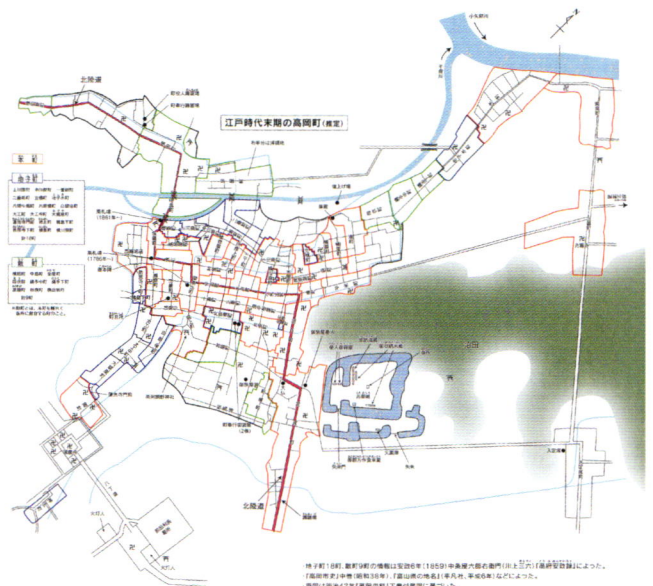
の3説がある。

縄手中町…ノウテとは、ナワテ（暖）の転訛で、畦道をいう。油町から地子木町の間の田んぼにそって町立てされたことから「ノウテ」と呼ばれ、縄手の字を当てた。

縄手下町…地形上、縄手中町の下手にあたる。

宮脇町……安政2年（1855）、下関村から請地して成立。堀上町の関野神社に隣接する。

新横町……安政2年（1855）、旧高岡御旅屋の北側に接する御林地と下関村の林野を請地してできた。新しく開いた横通りの町である。



「江戸時代末期の高岡町(推定)」
「高岡ものがたり」所収

平成24年12月27日、高岡商工会議所の「高岡の旧町名復活を推進する会」と復活に積極的な4自治会（平米町、坂下町、袋町、地子木町）が、円滑な町名変更に向けた支援を求める要望書を高岡市へ提出した。25年2月、高岡市は旧町名復活に向けた取組みのため、新年度予算案に事業費80万円を計上した。今後の伸展が注目される。

（文責・晒谷和子 2013年2月）

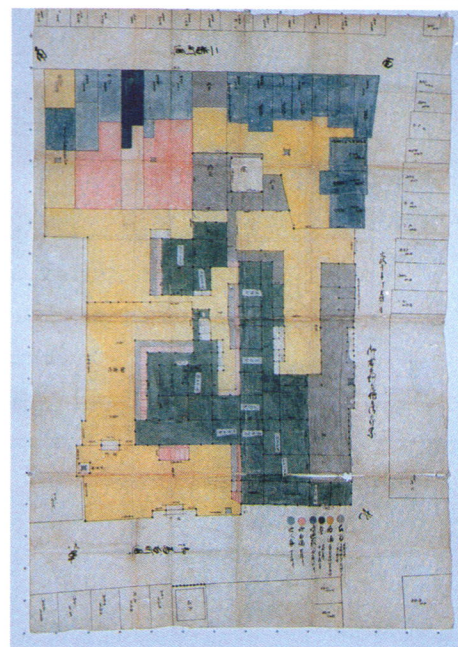
高岡町役人

高岡市立博物館

(1) 町年寄

高岡城下町行政の最高責任者は高岡町奉行ですが、加賀二代藩主・前田利長は町政を町奉行に監督させながら、町人の代表が自治的に行う方式をとりました。町役人中の最高位は利長入城の翌慶長15年(1610)に3名の宿老役が任命されたことに始まります。宿老役は元和6年(1620)に「町年寄」と改称され、定員は10名とされましたが、後に3名前後となりました。その任期に制限はなく、町政全般を統括する重職のため、当初は若干の俸給を受けていましたが、後に無給となりました。しかし、それにふさわしく諸役の免除やその他の特典が与えられ、なかには登城拝賀や苗字・帯刀を許される者もいました。

当初行政事務は、町役人の私宅で行われたといわれますが、承応元年(1652)〔一説には寛文11年(1671)〕に「町会所」という役所(現・高岡市二番町の永明寺)が創設されました。また、町奉行所もこの町会所内にありました。



「御宿天野屋伝兵衛家見取図」

江戸時代を通して高岡を代表する町役人であった天野屋(服部家)の平面図
文政10年(1827) 当館蔵

(2) 町算用聞・町肝煎

町算用聞は町年寄に次ぐ上級町役人で、町の経理・会計を担当していましたが、町年寄の職務を代行する場合もありました。創設は寛永・正保(1624~48)頃らしく、人数は一定せず、無給でした。町年寄と町算用聞は由緒正しく、能力の優れた町人の中から選ばれ、町奉行が任命しました。

町肝煎は慶長年中に、本役1名、脇役3名で始まりましたが、元和4年(1618)から本役3名となり、文化6年(1809)以後は4名になりました。町肝煎だけは、町民とじかに接して町政運営の円滑化にあたる激務のためか有給でした。

上記の町年寄・町算用聞・町肝煎は“町方三役”と称され、町人たちの尊敬を集めていました。



「道具屋鑑札」

高岡町が発行した道具屋商売の許可証
左より明治3年(1870)、万延元年(1860)
当館蔵

(3) その他の町役人

高岡の各町にはそれぞれ、1~2名の肝煎(上記の町肝煎とは別)がおかれ、諸般の事務を担当しており、その下には定員3名の町頭(始めは組合頭)がおり公務の取次ぎを行っていました。

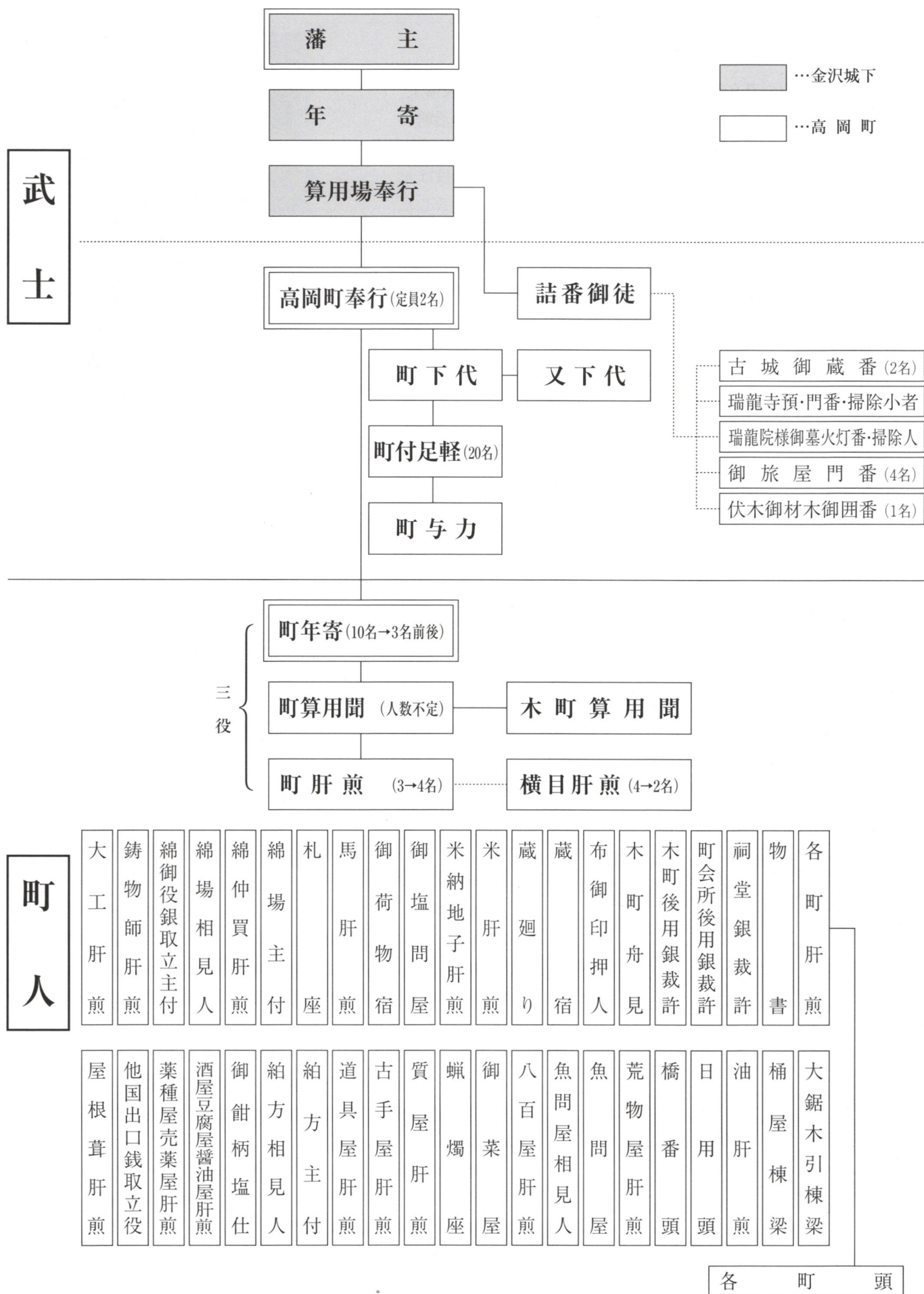
横目肝煎は町役人の動向に目を配り、町政全般の観察をする町役人で、定員は2名(始め4名)です。町会所内には留書(始めは物書)という書記が定員3名(始め1名)でいました。

そのほか、布御印押人・蔵廻り・米肝煎・御塩問屋・御荷物宿・魚問屋・綿場主付などは物流の拠点として栄えた高岡にとって、重要な役職でした。

金融担当の町役人として、瑞龍寺祠堂銀裁許・町会所後用銀裁許・木町後用銀裁許・札座などがいました。千保川の横田橋・中島橋の橋番を統率するのは橋番頭です。

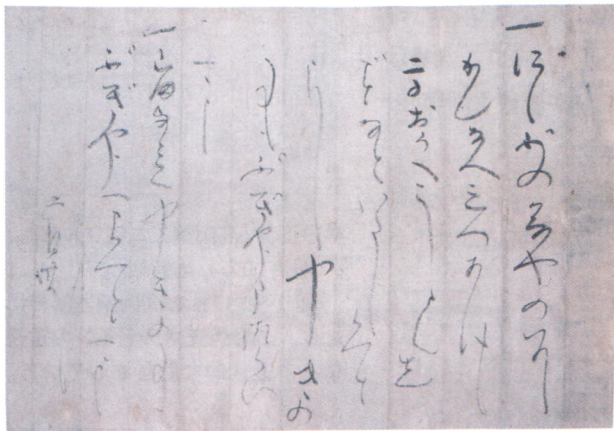
ほかには鋳物師・鍛冶・大工・油屋・桶屋など各種の職業を取り仕切るそれぞれの肝煎などがいました。

高岡町役人の組織図



高岡銅器

1. 江戸期 高岡鑄物の発生と興隆



前田利長書状（慶長年間）5月30日付 当館蔵
西部金屋から高岡に鑄物師を招いている。

法（同業者が守るべき最も大切なきまり）の厳守を誓い、代替わりには新しく免許状を願い受け、年頭や折々の礼を尽くすなど並々ならぬ心遣いをしていました。そして真継家は鑄物師らに、朝廷が認めた諸国通行の自由、山林竹木伐採などの特権を与えたのです。

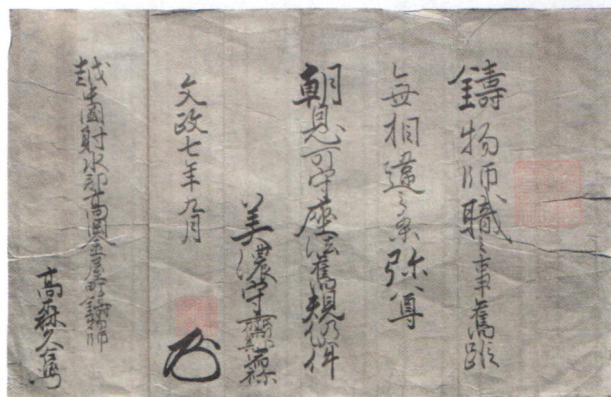
高岡では、江戸後期頃には梵鐘や大型の灯籠、花瓶などの銅器製造も本格化しました。また塩釜やニシン釜などの“ヒット商品”も生み出し、販路も全国に拡大し一層盛んになりました。

江戸時代末期には、新しい展開をみせた銅器鑄物技術の進展により、仏具や花瓶など日用品で装飾・鑑賞性の高い製品を産出します。また横浜・神戸などの「居留地貿易」にのり出す先進的な銅器問屋が現れ、国内はもとより海外にも盛んに輸出されるようになります。

加賀前田家2代当主・前田利長は、高岡開町2年後の慶長16年（1611）に、町づくりのため、鑄物発祥の地である河内国丹南郡（現・大阪府堺市・松原市の一部）の流れをくむ、越中国砺波郡西部金屋村（現・高岡市戸出西部金屋）の鑄物師（鑄物職人）を招きました。利長は彼らに、千保川対岸の5,000坪の土地（拝領地）を無償で与え、また諸役（税）も免除しました。高岡鑄物師は、はじめ鍋釜・鋤鍬などの鉄鑄物を製造していました。

その後も、加賀藩の手厚い保護により急速に力を増し、北国筋（若狭より越後までの北陸全域）における鉄鑄物業を支配するまでの勢力を保有し栄えていきました。

中世以来、全国の鑄物師は真継家（河内国丹南郡の領主で下級公家）に支配されていました。鑄物師たちは、真継家が定めた座



鑄物師職許状 文政7年（1824）高森克明氏蔵（当館寄託）
真継家12代・康寧が高岡鑄物師・高森久右衛門に代替わりを許可したもの。

2. 明治前期 高岡銅器産業の形成



高岡銅器会社の製品 明治26年（1893）頃
シカゴ・コロンブス万博出品。向かって右・関義平作、中央・中杉与三七作。同社社長は大橋三右衛門。

高岡は明治維新により旧富山・加賀藩の、当時日本一と言われた「加賀象嵌」の技術を持つ彫金師たちを招き入れました。また当時の殖産興業の気運にも恵まれ、盛んに開催された万国博覧会や内国勸業博覧会・各種共進会に盛んに出品・受賞し、銅器産地としての地歩を確立するに至りました。白崎善平・関澤卯市・横山弥左衛門・室江吉兵衛・中杉与三七・関義平らの優れた彫金師たちや、角羽勘左衛門・金森宗七・大橋三右衛門・塩崎利平ら先見性に富んだ銅器問屋らが、精力的に技術の向上・開発や販路の拡大に努め「高岡金工」の名声を国内外に広め、今日の基盤を築いています。

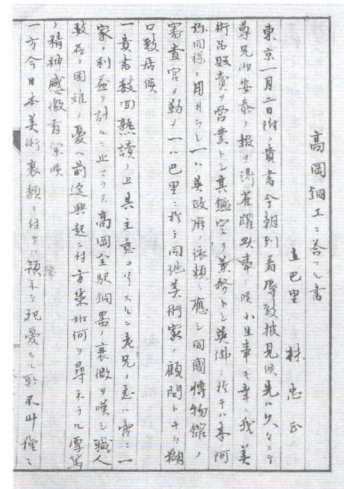
一方、創始以来の鑄物師の特権は維新後一切廃止され、誰でも自由に開業できるようになり、高岡の金属工芸産業はいよいよ発展することになります。

3. 明治後期～昭和前期 銅器産業の近代化と発展

西欧では、高岡出身の美術商・林忠正^{ただまさ}の活躍もあり、日本の美術工芸品が大きなブーム(ジャポニズム)を呼んでいました。けれども、明治の中ごろよりその勢いは少しずつ衰えてきました。高岡銅器業界は林忠正の助言(明治19年『高岡銅工ニ答フル書』)もあり、改善をはかりました。

また富山県も高岡銅器の近代化に協力し、明治27年(1894)には富山県工芸学校(現・県立高岡工芸高校)を、大正2年(1913)には富山県工業試験場(現・県工業技術センター)を高岡に創設し、設備の機械化などを進めました。その結果、分業が可能になり、業界は明治初期までの工房生産から、鍛造・彫金・着色業などの小企業を問屋が統轄する「問屋制家内工業体制」へと移り、生産量が増大しました。

昭和10年(1935)には生産量が日本一となりました。けれども同12年以降は戦時統制経済により、金属原料の不足に苦しみます。同17年(1942)指定作家以外の製造は禁止され、銅器産業は完全に途絶えてしまいました。



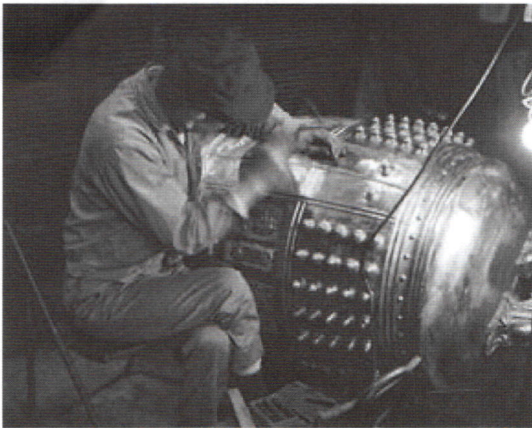
林忠正著『高岡銅工ニ答フル書』

(明治19年) 当館蔵

輸出不振に悩む高岡銅器業界に対し、市場調査やデザインの重視など、近代的な助言をしている。

4. 昭和後期～現代 戦後成長から未来への課題

高岡市は米空軍の空襲による被害を免れたので、銅器生産の設備は無傷で残りました。鋳物業者は、軍需物資ではなくなったアルミニウムに目をつけ、生活用品(鍋・釜)を生産しました。戦後の物資不足のなか、“作れば売れる”という「鍋釜景気」により、復興の足がかりをつかみました。その後もアルミ需要はますます高まったので、そのままアルミ産業に転向する業者も多くありました。



梵鐘の製作

梵鐘は戦時中の金属供出により全国の寺院から失われていたので、戦後、7代・老子次右衛門らの努力により、注文は高岡へ殺到した。現在も国内80%以上のシェアをもっている。

一方銅器は、原料不足などの困難もありましたが、昭和23年の米軍特需をきっかけに、日用品が多数輸出されました。また梵鐘・仏具や火鉢・花瓶などの生産も増え、同30年代後半からの高度経済成長にのり大きく躍進しました。昭和50年(1975)には国の伝統的工芸品産地に指定されました。

梵鐘や大型ブロンズなどを主力として、全国シェアが9割を超えると いわれる高岡銅器の販売額は、平成2年(1990)にピークを迎え374.5億円を記録しました。しかし近年は社会構造の変化により、低迷が続いています。それは設備投資の低下や経営の悪化、後継者不足など、産業の

基盤である問屋制

家内工業体制をゆるがす、多くの課題を抱えているからです。

これに対し、業界から海外での見本市への出展や、職人と問屋が共同して新商品開発を目指すなど、積極的な動きも出てきています。

平成17年には大澤光氏^{おおさわこうみん}が国の重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されました(高岡市民の人間国宝認定は、故・金森映井智氏^{えい い ち}について2人目)。

また高岡市では、平成18年度から市内全小・中・養護学校に「ものづくり・デザイン科」を創設しました。さらに高岡工芸高校の「目指せスペシャリスト」事業の実施や、富山大学芸術文化学部創設などにより、小学校から大学まで、ものづくりの一貫教育の環境が整い、高い技術と豊かな才能を持った多くの人材が育つことに期待をよせています。

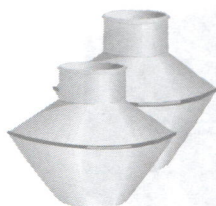


戸出銅器団地

銅器関連業者の多くは、用地拡張、自動車社会への対応などのため、江戸初期以来の金屋町を離れ、昭和40年代から市内の長慶寺工業団地や、赤祖父の問屋センター、戸出銅器団地などに移った。

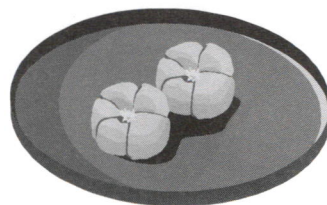
高岡銅器のあゆみ

江戸初期	●慶長14年（1609年）加賀藩二代藩主前田利長公が高岡城を築き、高岡の町を開く。 ●河内国丹南の流れをくむ鋳物師を、砺波郡西保金屋（現高岡市戸出西部金屋）から招き、加賀藩の保護のもと金屋町に開業させる。 ●鍋や釜、鋤などのほか、社寺用の鰐口や燈籠が鉄で作られる。
江戸中期	●仏具、花瓶、香炉などの銅鋳物が製造される。 ●宝暦年間、安川乾清など、高岡御車山に多くの技を残す。 ●問屋業が生まれ、江戸に販路を開く。
江戸後期	●横山弥左衛門など、多くの名工を輩出する。 ●仏具、火鉢類が多く生産され、全国的に販売される。
明治・大正	●輸出が本格化する。 ●明治44年（1911年）、高岡大仏の製作が始まる。
昭和前期	●日中戦争が勃発し、軍需工場へ転換する。 ●鋳物原料が不足し、メタリコン製品が生産される。 ●第二次世界大戦の勃発で、金属製品の供出が始まる。
昭和後期	●鋳物技術を生かしたアルミ器物の生産が盛んとなる。 ●戦前の神仏具、梵鐘、火鉢の生産が復活する。 ●鉄器工芸品の生産も盛んとなる。 ●昭和50年（1975年）、通商産業省から「伝統的工芸品」に指定される。
平成	●平成元年（1989年）、金森映井智（栄一）氏が重要無形文化財「彫金」の保持者に認定。 ●平成17年（2005年）、大澤光民（幸勝）氏が重要無形文化財「鋳金」の保持者に認定。 ●平成17年（2005年）、愛知万博に「未来の扉」出品。



高岡漆器のあゆみ

江戸時代	●慶長14年（1609年）、加賀藩二代藩主前田利長公が高岡城を築き、高岡の町を開く。 ●大場庄左衛門等が、新川郡大場村から高岡に移住し、箆笥や長持などの指物を作り、指物屋町ができる。 ●庄左衛門のもとに職人が集まり、高岡漆器は「町人工芸」として始まった。 ●これらの多くに朱漆が塗られ、「赤物」と呼ばれた。赤物は、加賀藩内だけでなく、越後や北海道にまで広まった。 ●元禄期、塗師屋八兵衛が「朱小まる盆」をつくる。 ●明和期、辻丹甫（砺波屋伊右衛門丹楓）が、京都より擬堆黒（朱）などの中国風の技術をもたらす。 ●化政期、砺波屋桃造が、堆黒に存星の技法を加えた作品を生む。 ●天保・弘化期、板谷小右衛門が、彫刻、彩色、存星の技術で活躍する。
明治・大正	●石井勇助が、中国・明時代の漆器を研究し、唐風で格調高い「勇助塗」を創出する。 ●三村卯右衛門が、錆絵技法を確立する。 ●立野太平治が、青貝塗の技法を確立する。 ●漆器産地としての基盤が築かれる。 ●明治27年（1894年）、富山県工芸学校（現県立高岡工芸高校）が設立され、校長の納富介次郎と教頭の村上九郎作により彫刻塗「鯛盆」が創作される。漆器業界に大きな影響を与える。 ●大正2年（1913年）、富山県工業試験場が設立され、工芸学校と連携して技術や意匠の指導にあたる。 ●農展、商工展、帝展をはじめ、海外の博覧会でも受賞する漆芸家を輩出する。
昭和前期	●組合が設立され、業界をあげて生産と販売の近代化を図る。 ●朝鮮工人や奈良から螺鈿を修得し、改良して螺鈿技法が確立される。 ●職人たちが競うように商工展へ出品し、多彩な技法の産地として認められていく。 ●第二次世界大戦前から戦中、漆不足の苦難の時代を迎える。 ●勲章箱の漆塗りや、組合でグライダー部品の生産を行うなど耐えしのぐ。
昭和後期	●木地、彫刻、加飾の工程を分業化し、共同事業への転換を図るなど、量産を可能にした。 ●高岡市塗装技術指導所を高岡商工奨励館内に開設。後継者育成を図る。 ●指導者に日展作家を招聘する。 ●全国漆器展で優勝を重ね、名声が高まる。 ●昭和50年（1975年）、高岡漆器の彫刻塗・勇助塗・青貝塗が、通商産業省から「伝統的工芸品」に指定される。
平成	●平成6年（1994年）、高岡市伝統工芸技術伝承事業を実施する。 ●平成17年（2005年）、愛知万博に「未来の扉」出品。





「赤物」から製漆業を経て、現在も仏壇製造・販売業を営む大場商店（昭和初期撮影）

（２）高岡「工芸」漆器の名工たち

元禄期(1688～1704)の塗師屋八兵衛や、明和期(1764～72)に活躍した砺波屋伊右衛門丹楓（辻丹甫）は、擬堆黒（朱）などの中国風の漆彫りの技術をもたらし、高岡工芸漆器の開祖といわれています。

さらに化政期(1804～30)には砺波屋桃造が、天保・弘化期(1830～48)には板屋小右衛門が活躍し、存星や彫刻塗に優れ、現在でも高岡御車山にその技をみることができます。

また、幕末から明治期にかけて、石井勇助が勇助塗を、三村卯右衛門が錆絵を、立野太平治は青貝塗の技法をそれぞれ創出・確立して、漆器産地としての基盤が築られました。

（１）「町人」工芸としてはじまる

高岡漆器の歴史は慶長14年(1609)加賀藩2代藩主・前田利長の高岡開町と同時に始まりました。利長は各地から商人や職人を集め、城下の発展を図ったのです。

新川郡大場村（富山市大場）から高岡指物屋町（のち檜物屋町）に移った庄左衛門は、箆笥や長持などの指物を作りました。この指物の多くには朱漆が塗られ「赤物」と呼ばれました。庄左衛門の元には職人が集まり、高岡漆器は「町人」工芸として始まりました。

「赤物」は高岡周辺だけでなく、加賀藩内（富山・石川県）、越後（新潟県）や、北海道までも広まったといえます。



擬堆黒総盆（伝辻丹甫作） 当館蔵

（３）高岡漆器「産業」の発展

明治27年(1894)に設立された富山県工芸学校（現県立高岡工芸高校）では、校長の納富介次郎（デザイン）と教頭の村上九郎作（彫刻）により彫刻塗「鯛盆」が創作され、漆器業界に大きな影響を与えました。

大正から昭和初期には、組合が設立され業界をあげて生産と販売の近代化が図られました。また職人たちは競って商工展へ出品し、技術の向上を目指し、多彩な技法の産地として認められていきました。

戦後は漆の輸入が途絶えて混乱しましたが、分業化、共同事業への転換などによって順調に発展し、昭和50年には国から「伝統的工芸品」に指定されるに至りました。



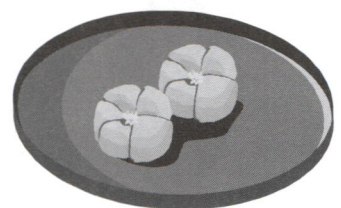
高岡彫刻塗「二匹鯛」 当館蔵

高岡漆器の歴史年表

年 代	主 な 出 来 事
慶長 14 年 (1609)	前田利長による高岡開町。大場庄左衛門が高岡檜物屋町に移住。家具を製造して、これに朱漆を塗った「赤物塗」が始まる。筆筥、長持、針箱等を職人が製作・直売。
元和元年 (1615)	「一国一城令」により高岡城が廃城。この頃高岡にて仏壇の製造が始まる。
元禄期 (1688～1704)	この頃、蒔絵の名工ぬしや八兵衛なる者がいた。椀、膳、盆などが作られ始める。
明和期 (1764～72)	砺波屋丹楓（辻丹甫）が京都で修行、帰郷し擬堆黒・朱、存星など中国の技法を伝来。「丹甫塗」が始まる。
文化期 (1804～18)	この頃に丹甫塗を受け継ぐ砺波屋桃造（鳴鳳堂）が活躍。
文政期 (1818～30)	板屋小右衛門が存星、木彫彩漆に妙技を振るう。
天保 10 年 (1839)	加賀藩13代・前田斉泰が高岡にて存星刻硯屏（板屋小右衛門作）と堆黒文箱（伊勢領屋桃二作）を買上げ。
嘉永～安政期 (1848～60)	大場屋が製漆商を始める（高岡における製漆商の始まり）。
嘉永 3 年 (1850)	初代石井勇助が中国風の各種材料、技法を併用した「勇助塗」を確立。
明治元年 (1868)	初代三村卯右衛門が錆絵、彩漆の研究を重ね、独自の「錆絵」技法を確立。
明治初期	明治に入ると、茶棚・器局・卓台・飾棚が、勇助塗で盛んに作られ、針指箱・櫛箱・長持・膳等嫁入り道具や、杉材を使用して火鉢・床卓等も作られた。
明治 6 年 (1873)	ウィーン万博に初代石井勇助が出品。
明治 10 年 (1877)	第 1 回内国勸業博覧会にて初代石井勇助が妙技賞を受賞。石井勇助、三村松斉らが初めて先進地を視察。
明治 15 年 (1882)	立野太平治が青貝細工を始める。
明治 27 年 (1894)	富山県工芸学校設立。初代校長・納富介次郎、彫刻科教諭・村上九郎作。
明治 30 年 (1897)	村上九郎作が鯛盆、手ぐり盆を創始し特産彫刻となる。
明治 42 年 (1909)	大坪商会設立、主に彫刻漆器を輸出（大正 8 年には高岡漆器商会と改称）。皇太子（のちの大正天皇）北陸行啓を機に高岡物産陳列所設立。
明治 43 年 (1910)	金丸次郎平が挽き物木地で火鉢を製造。
明治 45 年 (1912)	高岡漆器購買販売組合設立（初代組合長・3 代石井勇助）。
明治末～大正期	朴木村の舟木喜太郎が手ぐり鯛盆を製作。
大正 2 年 (1913)	二塚安太郎が東京市場に高岡漆器を紹介。富山県工業試験場開設。試験場にて三角ノミの研究が行われる。
大正 4 年 (1915)	高岡漆器同業組合設立。高岡唐漆器部会誕生。
大正 8 年 (1919)	輸出漆器が盛んに。生駒弘が高岡市立商工実修学校漆工部で指導。同校第 1 回卒業生が漆芸みどり会を発足。
大正 10 年 (1921)	高岡市工芸图案講習会始まる（昭和 4 年まで毎年 1 ヶ月、講師は山崎寛太郎等）。漆芸みどり会第 1 回展開催。
大正 13 年 (1924)	布目弥逸が螺鈿の最高峰技術「正倉院螺鈿」の修行のため昭和 3 年まで奈良の吉田辰之助に師事。木村天紅が朝鮮螺鈿の技術及び工人 7 人を高岡坂下町に移入し「朝鮮之螺鈿社」を開く。
昭和 元年 (1926)	国井喜太郎が富山県工芸学校校長に就任。
昭和 3 年 (1928)	同業組合で意匠新案登録制度 1 号を登録（石瀬松次郎）。彫刻技法にトントン彫が始まる。錆絵の屠蘇器、曙塗の会席膳煙草盆の全盛期。
昭和 8 年 (1933)	恵比寿、大黒など彫刻丸盆の本格的量産が始まる（高木作次郎）。高岡で鎌倉彫の彫刻塗が行われるようになる。
昭和 10 年 (1935)	この頃の庄川挽物はほとんどが高岡漆器の木地生産で占められていた。
昭和 12 年 (1937)	朝鮮螺鈿工人が帰郷。満洲事変により漆の輸入減少。この頃勲章箱の生産盛んに行われる。
昭和 13 年 (1938)	高岡漆器工業組合設立。
昭和 14 年 (1939)	漆の配給制実施。
昭和 15 年 (1940)	曲物火鉢の生産始まる。
昭和 17 年 (1942)	富山県漆器統制組合設立。
昭和 21 年 (1946)	富山県漆器統制組合を富山県漆器事業協同組合に改称。手提げ袋の持ち手（木口）を生産。
昭和 23 年 (1948)	カシュー塗料講習会実施（県工業試験場）。ベークライト素地漆器を輸出（高木作次郎）。勲章箱の半製品を進駐軍向けに宝石箱・煙草入れに転換して生産。物資不足で長手盆などの実用品が中心になる。
昭和 26 年 (1951)	漆の入手が困難になる。高岡塗装技術指導所（所長・山崎立山）開設。
昭和 29 年 (1954)	この年から昭和33年頃、大手電機メーカーの電熱火鉢が生産の 5 割を超える。
昭和 31 年 (1956)	プラスチック素地材による盆菓子器・ベリーセット・回転オーブ皿などが盛んになる。
昭和 33 年 (1958)	石油ストーブや電気炬燵等の暖房革命で、塗火鉢の生産が激減。文庫・硯箱・パネル等の室内装飾品が出始める。
昭和 39 年 (1964)	彼谷芳水が富山県指定無形文化財（勇助塗）に認定。
昭和 40 年 (1965)	高瀬想風が富山県指定無形文化財（錆絵）に認定。
昭和 44 年 (1969)	高岡市デザイン指導所開設。
昭和 45 年 (1970)	協同組合高岡漆器センター共同工場完成（理事長・黒田長太郎）
昭和 48 年 (1973)	商工ビル内に高岡市商工奨励館開設。あかね盆の開発。
昭和 50 年 (1975)	高岡漆器（勇助塗・彫刻塗・青貝塗）が通商産業大臣指定伝統的工芸品となる。伝統工芸高岡漆器協同組合設立。
昭和 58 年 (1983)	高岡市工芸デザイン指導所開設。新商品開発事業（金胎漆器／ふくろう・孔雀）。
昭和 61 年 (1986)	富山県工業技術センター、高岡市二上に開設。第 1 回工芸都市高岡クラフトコンペ開催（以降毎年開催）。
平成 6 年 (1994)	高岡伝統工芸技術伝承事業実施（乾漆）。

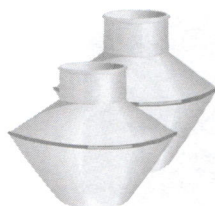
高岡漆器のあゆみ

江戸時代	●慶長14年（1609年）、加賀藩二代藩主前田利長公が高岡城を築き、高岡の町を開く。 ●大場庄左衛門等が、新川郡大場村から高岡に移住し、箆笥や長持などの指物を作り、指物屋町ができる。 ●庄左衛門のもとに職人が集まり、高岡漆器は「町人工芸」として始まった。 ●これらの多くに朱漆が塗られ、「赤物」と呼ばれた。赤物は、加賀藩内だけでなく、越後や北海道にまで広まった。 ●元禄期、塗師屋八兵衛が「朱小まる盆」をつくる。 ●明和期、辻丹甫（砺波屋伊右衛門丹楓）が、京都より擬堆黒（朱）などの中国風の技術をもたらし。 ●化政期、砺波屋桃造が、堆黒に存星の技法を加えた作品を生む。 ●天保・弘化期、板谷小右衛門が、彫刻、彩色、存星の技術で活躍する。
明治・大正	●石井勇助が、中国・明時代の漆器を研究し、唐風で格調高い「勇助塗」を創出する。 ●三村卯右衛門が、錆絵技法を確立する。 ●立野太平治が、青貝塗の技法を確立する。 ●漆器産地としての基盤が築かれる。 ●明治27年（1894年）、富山県工芸学校（現県立高岡工芸高校）が設立され、校長の納富介次郎と教頭の村上九郎作により彫刻塗「鯛盆」が創作される。漆器業界に大きな影響を与える。 ●大正2年（1913年）、富山県工業試験場が設立され、工芸学校と連携して技術や意匠の指導にあたる。 ●農展、商工展、帝展をはじめ、海外の博覧会でも受賞する漆芸家を輩出する。
昭和前期	●組合が設立され、業界をあげて生産と販売の近代化を図る。 ●朝鮮工人や奈良から螺鈿を修得し、改良して螺鈿技法が確立される。 ●職人たちが競うように商工展へ出品し、多彩な技法の産地として認められていく。 ●第二次世界大戦前から戦中、漆不足の苦難の時代を迎える。 ●勲章箱の漆塗りや、組合でグライダー部品の生産を行うなど耐えしのぐ。
昭和後期	●木地、彫刻、加飾の工程を分業化し、共同事業への転換を図るなど、量産を可能にした。 ●高岡市塗装技術指導所を高岡商工奨励館内に開設。後継者育成を図る。 ●指導者に日展作家を招聘する。 ●全国漆器展で優勝を重ね、名声が高まる。 ●昭和50年（1975年）、高岡漆器の彫刻塗・勇助塗・青貝塗が、通商産業省から「伝統的工芸品」に指定される。
平成	●平成6年（1994年）、高岡市伝統工芸技術伝承事業を実施する。 ●平成17年（2005年）、愛知万博に「未来の扉」出品。



高岡銅器のあゆみ

江戸初期	●慶長14年（1609年）加賀藩二代藩主前田利長公が高岡城を築き、高岡の町を開く。 ●河内国丹南の流れをくむ鋳物師を、砺波郡西保金屋（現高岡市戸出西部金屋）から招き、加賀藩の保護のもと金屋町に開業させる。 ●鍋や釜、鋤などのほか、社寺用の鰐口や燈籠が鉄で作られる。
江戸中期	●仏具、花瓶、香炉などの銅鋳物が製造される。 ●宝暦年間、安川乾清など、高岡御車山に多くの技を残す。 ●問屋業が生まれ、江戸に販路を開く。
江戸後期	●横山弥左衛門など、多くの名工を輩出する。 ●仏具、火鉢類が多く生産され、全国的に販売される。
明治・大正	●輸出が本格化する。 ●明治44年（1911年）、高岡大仏の製作が始まる。
昭和前期	●日中戦争が勃発し、軍需工場へ転換する。 ●鋳物原料が不足し、メタリコン製品が生産される。 ●第二次世界大戦の勃発で、金属製品の供出が始まる。
昭和後期	●鋳物技術を生かしたアルミ器物の生産が盛んとなる。 ●戦前の神仏具、梵鐘、火鉢の生産が復活する。 ●鉄器工芸品の生産も盛んとなる。 ●昭和50年（1975年）、通商産業省から「伝統的工芸品」に指定される。
平成	●平成元年（1989年）、金森映井智（栄一）氏が重要無形文化財「彫金」の保持者に認定。 ●平成17年（2005年）、大澤光民（幸勝）氏が重要無形文化財「鋳金」の保持者に認定。 ●平成17年（2005年）、愛知万博に「未来の扉」出品。



高岡大仏

高岡市立博物館



雪の日の高岡大仏（2003年2月撮影）

町並みの中の大仏

高岡大仏は、大手町（高岡古城公園の近く）の浄土宗のお寺・鳳徳山大仏寺にある、高さ約16メートルの阿弥陀如来坐像です。この青銅の大仏は、昭和8年（1933）5月に開眼式が開かれたもので、高岡の人々から「だいぶつつあん」と呼ばれて親しまれてきました。「日本三大仏」と自慢されることもあります。

奈良の大仏はお堂の中にあり、鎌倉の大仏は森を背にしていますが、高岡大仏は町並みの中に突然大きな姿を見せ、強い印象を与えます。松木宗左衛門や荻布宗四郎を始めとする篤志家の運動や寄付によって実現したと言われ、高岡銅器の中でも最大のものの一つです。朝な夕な拝礼する人が絶えませんが、高岡の技の象徴でもあるのです。

高岡大仏の歴史

高岡大仏は三「大」仏であるだけでなく、三「代」大仏でもあります。初代と二代の大仏は木像で、いずれも火事で失われてしまいました。初代は延享2年（1745）、坂下町極楽寺の良歓という人が建てたとされています。高さ約9.7メートルの木像でしたが、文政4年（1821）に焼けてしまいました。二代目は

天保12年（1841）に再建されたのですが、これも明治33年（1900）6月の大火で失われました。この大火の少し前に出た「高岡繁盛双六」（北陸中央新聞附録、明治33年1月、当館蔵）には、二代目の大仏の姿が土蔵のようなお堂とともに描かれています。

言い伝えでは、高岡大仏の初めは、もっと昔のことになっています。鎌倉時代に源義勝という人が、二上山のふもとに高さ約4.8メートルの仏像を作り、前田利長がこれを高岡開町の年（1609年）に町中に移したというのです。

今の高岡大仏は、その基壇がお堂になっていて、中には木造の大きな仏頭が安置されています。これは二代目の大仏の焼け残りと伝えられてきましたが、「高岡繁盛双六」に描かれたのとは違うもののようです。高岡市の地方史家・富田保夫氏の調査『高岡大仏関連年表』（改訂増補版2001年、高岡市立中央図書館蔵）により、火事の翌年（明治34年4月）に寄進されたものであることが分かりました。大火の直後から、何らかの再建計画があったことになります。



「高岡繁盛双六」部分（明治33年1月、当館蔵）

なぜ銅像なのか

しかし、組織的な動きは、明治40年（1907）からのことでした。この年5月、大仏再建のための「寄附金募集ノ義二付願」（大仏寺蔵）が富山県庁に提出されます。そこには、前の大仏と同じような、木像とお堂を再建する計画が記されていました。翌月には「高岡大仏再興事務所」の趣意書が作られ、募金の申込書も配布されました。申込書では急に話がかわって、「銅

像四丈五尺」(約 13.6 メートル)を作ると呼び掛けています。趣意書に名を連ねた発起人は、堀二作、鳥山敬二郎、武田儀八郎、室崎間平、木津太郎平、塩崎利平、菅野伝右衛門ら 52 名、市内の名士が網羅されていました。銅像は木像よりもお金がかかりますが、そのお金は高岡の銅器業界に回るわけです。発起人たちの立場からして、新しい大仏には火事に強いだけでなく、地場産業のテコ入れになる期待もあったと考えられます。

しかし、そのままでは県への届け出が偽りになってしまいます。ようやく大正 5 年(1916)2 月になって、県に「大仏像改造模様替許可願」(大仏寺蔵)が出されました。「先の知事川上氏及び故青木(正しくは青山)工芸校長」の勧めもあって、計画を銅像に変更したいと書かれています。転出した元県知事と富山県立工芸学校(今の県立高岡工芸高校)の亡くなった前校長という、もういない二人の意見を理由にした所は不自然で、かたちだけの届け出だったように思われます。実際、銅造での大仏制作は、すでに明治 44 年(1911)から始められていました。市長や高岡商業会議所(今の高岡商工会議所)会頭などの要職も務めた再建計画の発起人たちは、「民」でも「官」でもあるような存在でした。大仏は純然たる民間事業と言うより、旦那衆が大きな力を持つ古い町ならではの、「民」が「官」と氣息を通じ合わせた所に生まれた事業だったと言えるかもしれません。



大仏再建寄付金応募者人名簿(明治 40 年 6 月、大仏寺蔵)

どのように作られたのか

高岡大仏の原形を手掛けた中野双山(1881~1940)は、富山県立工芸学校、東京美術学校(今の東京芸術大学)で塑像を学んだ人です。東京での同級生には朝倉文夫や藤川勇造など、後の大家もいました。明治 38 年(1905)頃に中退・帰郷し、大仏再建計画に携わります。大仕事に若い人材が抜擢されたように

も思われますが、彼の塑像や鑄造に関する新知識が求められたのかもしれませんが、中退の理由は大仏のためだったとも考えられますし、そもそも東京への進学自体、そのための国内留学だった可能性もあるでしょう。



大仏頭部原型と中野双山(少年の右、明治 44 年)

明治 44 年(1911)9 月には大仏頭部の鑄造が完了しますが、資金難などにより、作業はなかなか進みませんでした。明治 33 年(1900)の大火のあと、開眼式が開かれる昭和 8 年(1933)まで 33 年間、高岡大仏再興事務所の趣意書が出る明治 40 年(1907)から数えても、四半世紀かかったことになります。

奈良や鎌倉の大仏は、輪切りにした体を重ねるように、下から順に鑄造したと考えられています。高岡大仏を間近に観察すると、膝のあたりまでは奈良や鎌倉と同じ工法を取ったのか、一体で鑄造されているようです。胸や腹のあたりでは、あちこちに丸いリベットの跡が見られます。これらの部分は四角いパネル状のパーツに分けて作られ、骨組にリベット止めする方法が取られたという説があります(定塚武敏他『高岡銅器史』桂書房、1988 年、578~579 頁)。パネルの縁にジグソーパズルのピースのような凹凸を作り、互いにはめ合わせている所もあります。部位によって異なる方法が取り入れられているようです。

今の大仏は直径約 4.5 メートルの円光背を背負っていますが、これは昭和 33 年(1958)に取り付けられたもので、開眼式の時にはありませんでした。昭和 56 年(1981)には大仏を 11 メートル後方に移動させて修理し、その前を公園として整備する工事が完成しました。平成 19 年(2007)にも大がかりな修復が行われ、現在に至っています。

母衣武者行列

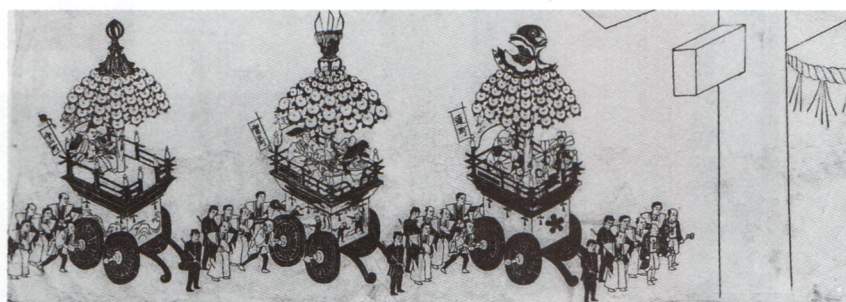
高岡市立博物館

「母衣」とは竹籠などでふくらませた布のことで、騎馬武者が背負い、後方からの矢よけなどにした指物さしものの一種です。戦国時代、母衣を着用して大将に近侍し、伝令などに戦場を駆けめぐった“母衣（掛）武者”は、軍団のエリート集団でした。

高岡母衣武者行列の起源は明らかではありませんが、高岡御車山の行列次第が記録された「御祭礼行列調理帳」（『高岡市史』中巻P371）によると、遅くとも享保元年（1716）にはその存在が確認できます。次いで宝暦13年（1763）の「正一位関野神社／正一位加久弥神社／御祭禮行烈」（高岡市立中央図書館蔵）にも6町内が「幌懸武者ほろかけ」を出していることが見いだせます。しかし、この2点の史料はいずれも文字史料でありその実像は不明でしたが、明治16年（1883）の「越中国高岡／関野神社祭礼繁昌略図付録」という木版画には8人の母衣武者が神輿・御車山を先導している様子が描かれており、往時の祭礼の賑やかな様子がよくわかります。

この高岡関野神社の母衣武者の外にも、市内の大木白山社と川巴良諏訪神社の祭礼においても母衣武者行列が行われていました。両神社とも高岡関野神社の母衣武者に影響を受けて始まったと思われますが、詳しくは分かっていません。

曳山や神輿を先導し、祭りを盛り上げていたこれらの母衣武者行列は、やがて分離独立して、母衣武者のみの行列となり、昭和3、40年代頃まで行われていました。現在でも、祭礼当日には各氏子町内の“母衣宿”において母衣（甲冑）とともに大小の纏まと、旗はっぴ、法被などが飾られて、曳山や神輿を迎えています。



越中国 高岡 関野神社祭礼繁昌略図 付録
明治16年(1883) 当館蔵

○高岡関野神社

絢爛豪華な曳山で有名な高岡御車山祭りは、高岡関野神社の春季例祭（5月1日）です。

山町（御車山などを持つ10町内）とは別に、時代により数の増減はありましたが、現在では博^{ばく}勞^{ろう}町・元^{もと}町・梶原^{かじわら}町・平^{ひら}米^{まい}町・宮脇^{みやわき}町一丁目の5町内が母衣（甲冑）・大小の纏などを母衣宿で飾り、御車山を迎えています。鴨島^{だいま}町の大旗は以前は行列を先導していましたが、現在は町内に立てられています。

史料によると江戸時代には上記の町内以外にも、利屋^{とぎや}町・白銀^{しろがね}町・片原横町・鴨島町などの母衣武者が大小の纏、床几^{しょうぎ}持ち（小姓）などを従え、行列にも参加していたようです。



ばく ろう まち
博 勞 町



もと まち
元 町



ひら まい ちょう
平 米 町



しろ がね ちょう
白 銀 町



しょうじょうひだいま
鴨島町 狸々緋大旗



宮脇町一丁目



梶原町 母衣宿にて 大正～昭和初期頃



大木白山社春季例祭 明治～大正初期頃

○大木白山社

高岡市内下関地区の鎮守である、大木白山社の春季例祭は毎年5月16日に行われています。

以前は氏子各町内が母衣武者を仕立て、神輿を先導していたようですが、現在では大鋸屋町、大工町、大工中町、鉄砲町・白銀後町（昭和期に分離し、一体で活動している）の5町内が母衣武者装束一式を母衣宿に飾りつけ、神輿を迎えています。



てっ ほう まち しろ がね ちよう
鉄 砲 町・白 銀 町



復活した鉄砲町の母衣武者行列 平成9年



お が や ちよう
大 鋸 屋 町



だい く まち
大 工 町



だい く なか まち
大 工 中 町



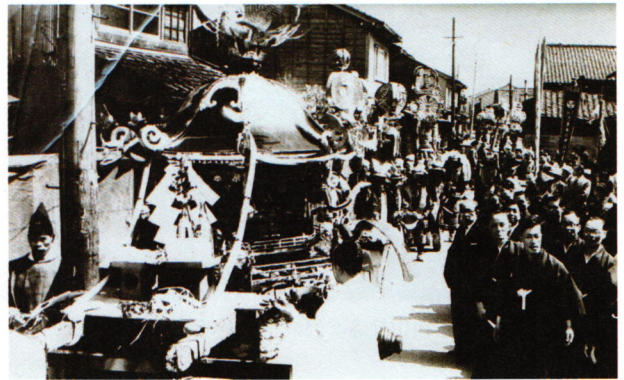
大工中町
ビロード包白糸威六枚胴具足

かわら ○川巴良諏訪神社

市内川原地区の信仰を集める、川巴良諏訪神社の春季例祭にも母衣武者行列が行われていました。その起源は定かではありませんが、明治2年（1869）にそれまで兼務社であった高岡関野神社から宮司が分家したので、その前後からとも考えられています。

昭和38年までは氏子8ヶ町の^{はたご}旅籠・^{かみがわら}風呂屋・上川原・中川原・^{ひものや}櫓物屋・川原上・二丁・一番新からそれぞれ母衣武者を出していたようですが、現在では毎年5月10日の祭礼日に各町内で飾りつけられるのみとなっています。また平成2年、二番新町でも母衣武者道具一式が再発見され、飾りつけられています。

この母衣武者はそれぞれ前田利家・源義経・上杉謙信・徳川家康など名将の名を載っているのが特徴的です。



川巴良諏訪神社春季例大祭 昭和37年



なか がわら まち
中 川 原 町



かみ がわら まち
上 川 原 町



かわら かみ ちよう
川 原 上 町



いち ばん しん まち
一 番 新 町



に ちよう まち
二 丁 町



ひ もの や ちよう
櫓 物 屋 町



一番新町 母衣宿にて 昭和43年頃



に ばん しん まち
二 番 新 町



櫓物屋町 母衣宿にて 昭和20年代頃

富山県立工芸学校

高岡市立博物館



富山県立工芸学校（明治 35 年）

高岡の工芸学校

明治 27 年（1894）6 月、政府は「実業教育費国庫補助法」を公布しました（施行は同年 9 月）。「工業・農業・商業学校」などに対して、国が補助金を交付することを定めたものでした。高岡市長・堀二作（県会議長を兼任）は、この機会をとらえ、高岡に工芸学校を作ることを富山県知事・徳久恒範に提案します。こうした誘致運動は綱引きになることも珍しくありませんが、堀二作の周到な議会対策もあって、明治 27 年 10 月に富山県工芸学校が誕生しました（明治 34 年に富山県立工芸学校、昭和 16 年に富山県高岡工芸学校、昭和 23 年に富山県立高岡工芸高等学校と改称）。高岡では初めての中高等教育機関でした（県立高岡高校の創設は明治 31 年）。

徳久知事の方も、産業振興には大いに意欲を持っていました。

高岡では富山県工芸品陳列場も開いていますし（明治 26 年 4 月）、工芸学校と同じ月には福野に富山県簡易農学校（今の県立県立南砺福野高等学校）も開きました。徳久は旧佐賀藩士で、富山県知事になる前は石川県書記官を務めていました。その間の明治 20 年（1887）7 月、金沢区工業学校（今の石川県立工業高等学校）が開かれています。その初代校長は、徳久と同じ佐賀出身の納富介次郎でした。徳久は、高岡の工芸学校にも納富を招きました。

初代校長・納富介次郎

納富は弘化元年（1844）の生まれ、チェコやフランスで陶磁器の製造法を学び、帰国後は輸出工芸の振興に力を尽くした人でした。明治 20 年代まで、日本の年間総輸出額の 10 分の 1 は工芸品が稼ぎ出していたという話があります。長く鎖国してい

たこともあって、精密な技をこらした日本の工芸品は、大いに珍しがられたのです。納富は、日本の輸出工芸をさらに美しくするため、政府が行っていたデザイン指導の中心人物でした。また、工業的な製造法や、同業者組合の組織なども研究していました。

しかし、明治の半ばを過ぎると、たとえば八幡に製鉄所ができるなど、日本の産業は手工業から機械工業・重工業へと転換していきます。納富が手掛けてきた仕事は、時代に合わないものになろうとしていました。彼が金沢や高岡のような地方工芸産地の指導に転身したのは、そういう時代だったのです。

他の町では高岡に新しい学校が作られたことを面白く思わない向きもありました。富山県には流れの激しい川が多く、たびたび水害や土砂崩れが起こっていました。そこで県の年間予算は、その約9割が土木費に費やされる時さえありました。徳久知事は、それを高岡の工芸学校のような、教育と産業振興のために割いたのです。知事と県議会の関係は緊張し、不信任案が可決されるに至ります。このため、徳久知事は香川県に転任することになりました。徳久は高松に香川県工芸学校（今の香川県立高松工芸高等学校）を作り、その初代校長にも納富を招きました。香川県では名知事と慕われたようです。

大正期の激動

銅器や漆器の仕事は、親方の下で働きながら身につけるものでした。せっかく開かれた高岡の工芸学校でしたが、そういう仕事を学校で勉強するというのを、理解しない人たちも多かったのです。大正6年（1917）に工芸学校に入り、後に歌人となった大坪晶一によれば、この頃の卒業生は「生意気で、技術者としては中途半端」と見られることもあったようです（『自叙伝 青春挽歌』短歌時代社、1965年、11頁）。問屋制家内工業という高岡の産業構造には、行政主導の近代化にはなじまない面がありました。

こうした状況が変わったのが、第4代校長の伊藤宣良の時でした。明治43年（1910）に校長となり、大正15年（1926）に退任するまで、その在職期間は歴代最長です。大正2年（1913）、工芸学校に隣接して、富山県工業試験場（今の富山県工業技術センター）が開かれます。場長以下の職員は伊藤校長はじめ教員が兼務し、実業教育と業界指導を一体的に手掛け、新素材・新技法の研究開発も行われました。さらに大正8年（1919）には、工芸学校に工芸部のほか応用化学部と機械電気部が新設され、定員が一挙に3倍になります。「工芸」だけでなく、「工業」の学校として新たな役割を果たそうとしたわけです。現在の県

立工芸高校のかたちは、この時に始まったと言えます。

伊藤校長は正に工芸学校の中興の祖でしたが、その去り方は残念なものでした。大正15年3月のこと、菓子折を持って来た生徒の懇願に折れて成績簿を書き直し、上級学校への推薦書も書いてやったというのです。何かと鷹揚な時代らしいことだったわけですが、これが背任行為であると大きく報道されてしまいました。伊藤校長は即座に辞表を出しましたが、以後も新聞各紙は連日の報道合戦を続けています。同窓会には工芸から工業へと重心を移した母校に不満を抱く向きが多く、教員も工芸派と工業派に分かれて対立する中で起こった事件でした。

多士済々の卒業生

伊藤校長の事件は、創立から20年を経た高岡の工芸学校が、その存在感を大きく増したことも伝えているでしょう。工芸から工業へと展開する高岡の産業構造の変化の中で、この学校も不安定にならざるを得なかったように思われます。高岡の工芸学校の歴史は、20世紀以後の我が国の産業史・工芸史・美術史を考える上で、非常に興味深く、重要なものです。

その卒業生には、多士済々の人物が輩出されています。ここでは限られた故人の名前をあげるにとどめますが、まず彫刻家・本保義太郎（1875～1907）は、日本人彫刻家として初めてパリの伝統ある公募展「サロン」に入選、ロダンから激励を受けましたが、若くしてパリで客死しています。畑正吉（1882～1966）も彫刻家、文化勲章を始めとする勲章のデザインも手掛けました。昭和8年（1933）に開眼式を開いた高岡大仏を代表作とする彫刻家・中野双山（1881～1940）や、デザイナー・国井喜太郎（1883～1967）は、この畑の親友でした。国井が初代所長を務めた商工省工芸指導所は、ドイツの建築家ブルーノ・タウトを招くなど、日本のモダンデザインの原点となります。

日本画家・郷倉千靱（1892～1975）と漆芸家・山崎覚太郎（1899～1984）は、共に日本芸術院会員。山崎は文化功労者ともなり、日展の総帥として美術界に強い影響力を及ぼしました。デパートの丸井の創業者・青井忠治（1904～1975）のような財界人も出ています。金工家・金森映井智（1908～2001）は、県在住者初の人間国宝でした。漫画家・藤子・F・不二雄（1933～1996）は、『ドラえもん』などが全世代に親しまれる巨匠です。金工家・大角勲（1940～2010）は、県在住者として初めて日本芸術院賞を受賞しています。納富初代校長以来、「尚美」（美をたつとぶ）の二文字を掲げる「工芸」の校風は、幅広い才能を育んで来たのです。

（文責・藤井素彦、2012年3月）

展示室1 解説 放生津にきた室町幕府10代将軍 足利義材

展示室1に入ると、戦国時代の放生津に5年間滞在した将軍 足利義材を紹介するコーナーがあります。義材は「銀閣」を立てた8代将軍足利義政の甥です。

義材は、文正元(1466)年7月30日に生まれました。当時、幕府内は大名による主導権争いが続いていました。そして、8代将軍義政の後継ぎをめぐり、義政の子義尚と義政の弟義視をそれぞれ推す大名たちが対立し、応仁元(1467)年から11年間にわたり、京都周辺で合戦が続きました(応仁の乱)。その後、9代将軍となった義尚が早世したため、延徳2年(1490)7月5日に義視の子である義材が、越中の守護大名である畠山政長の助けをえて10代将軍となりました。

しかし、義材や政長と仲が悪かった丹波(京都府)守護細川政元は、明応2年(1493)4月に反乱を起こし、義材のいとこを将軍

に立てました。政元は河内(大阪府)にいた義材と政長を攻め、政長は自害、義材は捕らわれて京都に幽閉されました。ところが6月に義材は京都を脱出し、越中(富山県)の放生津へやって来たのです。放生津には、政長の有力家臣である神保長誠がいました。長誠は寺を改装して将軍御所としました。御所には能登(石川県北部)の畠山氏、加賀の富樫氏(石川県南部)、越前(福井県東部)の朝倉氏、越後(新潟県)の上杉氏ら守護たち、奉公衆・奉行人などの幕府の役人約70人、将軍と朝廷の間を取り持つ公家衆、宗教行政や財政に関わる禅僧が集まりました。越中武士の遊佐氏、椎名氏、土肥氏らも義材を助めました。人々に支えられ、義材は引き続き将軍として振る舞い、幕府の命令を伝える公文書を送り、義材の幕府政権は、越中御所・越中公方と呼ばれました。

東山文化のリーダーである室町将軍を迎えた放生津は、空前絶後の繁栄を迎え、陸奥(福島県)の有力大名である白河結城政朝ら各地の武士、飯尾宗祇など多くの文人も訪れました。その様子は、宗祇の句集や義材に同行した歌人伊勢貞仍の歌集「下総集」に書きとどめられています。

放生津で力を蓄えた義材は、細川氏に政権を返すよう交渉するため、明応7年(1496)越前へ移りました。しかし交渉は失敗し、義材は京都を攻めます。しかし義材は破れ、周防(山口県)の守護大内氏を頼りました。永正5年(1508)6月、義材は大内氏と京都に攻め込み、政権を回復しました。その後、義材は政争に巻き込まれて大永3年(1523)4月9日、阿波(徳島県)で亡くなりました。墓所は阿南市の西光寺にあり、子孫は平島公方と呼ばれ、文化2(1805)年に京都へ移るまで同地に留まり、儒学者や僧侶など文化人が集まる名家として栄えました。

義材は、諸国を巡る旅で出会った人々を思い出し、慈悲の心を反映した政治を目指したこと(『塵塚物語』)や、将軍御所を襲った賊を自ら太刀をとり撃退した(『実隆公記』永正6年10月条)などの逸話が残されています。

富山県内には、義材が政権回復を祈り修築させた雄山神社前立社壇本殿(立山町岩峯寺・国指定重要文化財)、雄山神社中宮祈願殿若宮社殿(同町芦峯寺・同町指定文化財)、義材が持参した天神像をまつる天神山(魚津市)、義材が2カ月滞在したという小川寺(魚津市)などがゆかりの地として知られています。

なお、義材は、越中を去った後、義尹、ついで義種と改名しています。



足利義材(義種)像(京都府 等持院 蔵)



足利義材の花押

射水市新湊博物館

〒934-0049 富山県射水市鏡宮 299

Tel:0766(83)0800 Fax:0766(83)0802

国指定重要文化財 ^{にいかわぐんむらむらくみわけ え す てんほう いしくろのぶゆき} 新川郡村々組分絵図 (天保9年石黒信之製図) 複製

別称:天保9年加賀藩領新川郡十村組図 財団法人高樹会蔵

法量:55.0×71.8 縮尺:道程1里 1寸2分 (1:108,000)

この絵図は石黒右衛門信之によって、祖父の信由が測量、作図した絵図をもとにして天保9年(1838)に作られたものです。

同年には^{いみず}射水郡、^{となみ}砺波郡、^{にいがわ}婦負郡、^{えちやう}新川郡の越中4郡すべての十村組図が作られています。他郡は従来の組分けと同じですが、この新川郡のみは天保9年の1年限りの組分けでたいへん珍しいものです。

新川郡は大半が加賀藩百万石の領地ですが、赤字で書かれているのは藩の境界に隣合う富山藩領の村々の名前です。

十村組は加賀藩が領民を支配するために作った組織です。新川郡では従来は14組、射水郡は7組、砺波郡は10組に分けられ、十村という農民身分の役人が各村の肝煎・組合頭を通じて村や町を支配しました。他の藩では大庄屋と呼ばれる人たちに似ています。

加賀藩で十村が支配する組の範囲が確定したのは、射水郡と砺波郡では寛永19年(1642)でした。しかし新川郡の場合は、途中で富山藩が生まれたり、さらに領地替えがあったりして、なかなか一定せず、寛文12年(1672)にやっと組の範囲が確定しました。

しかし、その後150年ほど経ち、新田開発や産業の発達によって人口が増加し、組ごとの戸口に大きな差が出てくると、従来通りの十村組では農民たちを支配することは難しくなりました。天明や天保の大飢饉は貧しい農民たちをさらに苦しめました。彼らは時には重い年貢に対する騒ぎを起こすようになりました。

そこで加賀藩は天保8年(1837)から藩政改革に取りかかるとともに、その一環として戸口の増減の状況や正確な地図を参考にして十村組の見直しをすることになりました。こうしたことが背景となって9年に各郡の十村組絵図が作られたのです。このとき従来の組割りとは異なったのは新川郡だけでした。特に変化の著しい加積組が東と西に2分されたのです。そしてこの年の各郡絵図などを参考に本格的に十村組の再編成を行ったのは翌10年(1839)のことでした。その結果、新川郡の十村組は16、射水郡は10、砺波郡は16に組数が増やされ、組に所属する村もかなり入れ替えが行われました。



射水市新湊博物館

〒934-0049 富山県射水市鏡宮 299

Tel:0766(83)0800 Fax:0766(83)0802

国指定重要文化財 射水郡分間絵図

文政6年(1823) 射水郡高木村 石黒信由作図 財団法人 高樹会蔵

分間(縮尺):1町1分(3万6000分の1) ※複製ではさらに縮小

法量 :99.3×120.5(複製印刷 57×70)

江戸時代、この新湊に生まれ、日本有数の測量家、地図製作者として知られる石黒信由が、測量し、作図した加賀藩領の郡図の一つです。現在の石川・富山県を含む加賀藩領には、加賀・越中・能登の三か国があり、合わせて10の郡がありました。

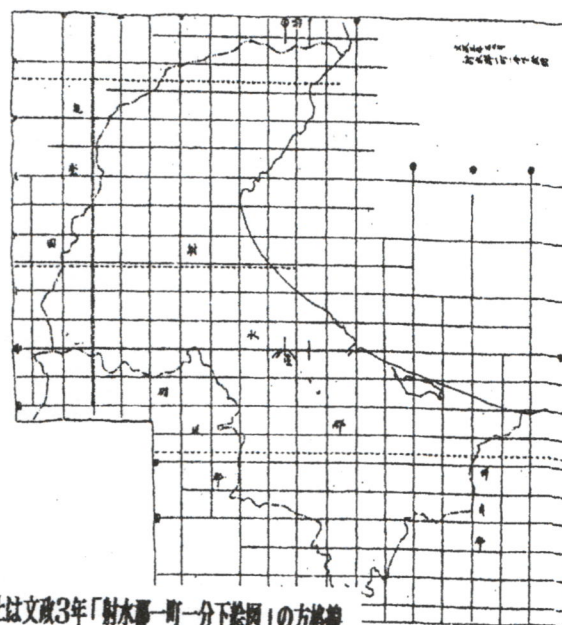
江戸時代の越中には東から新川郡、婦負郡、射水郡、砺波郡の4郡がありました。ただし新川郡の西の一部と婦負郡は富山藩10万石の土地でした。後はすべて加賀百万石の領土です。越中の西の海岸線を含む射水郡は現在の氷見市、高岡市、射水市の辺りを含んでいました。

石黒信由は射水郡高木村(現、射水市)の肝煎(庄屋)でしたが、和算や測量技術に優れていたため郡内各地の測量・検地を依頼されました。やがて仲間や地元の協力で射水郡全体を5か月間かけて測量してできたのが、射水市新湊博物館第2展示室にある「射水郡大絵図」(複製)です。この大絵図は、文化7年(1810)加賀藩に提出されましたが、そのち密な描き方と正確さは加賀藩の武士たちを驚かせました。これを基本にして作られたのがこの「射水郡分間絵図」です。

「射水郡分間絵図」の下図は文政3年(1820)7月に作製され、「射水郡一町一分下絵図」と呼ばれています。1万2000分の1の縮尺で描かれた大絵図をさらに3分の1に縮小しました。射水郡内の道程測量では、郡内いづれから見通しのよい二上山(273メートル)を測量の交会点として利用しましたが、今度は加越能3か国共通の作図法による郡図を作ることが条件であったため、3か国の接点である三国山(323メートル)を基準とした方格線を描き、これをもとに作図しました。測量の道筋ごとに1町1分の縮尺で作られた切下絵図は方格線が引かれた大きな下絵図紙に写し取られ、「射水郡下絵図」が作られました。この絵図は着彩し「射水郡分間絵図」として文政6年、藩に提出されたもので、高樹文庫にあるのはその控えです。

この絵図には、山・川・谷・野や村の位置、道路、境界、海岸のほか駅、堤、城郭跡、寺社なども記されています。さらに村名のところに中世の郷庄保も示されています。郷庄保は室町時代、荘園の解体によって生まれた村落共同体の地域名称です。江戸時代の領民支配は郡奉行配下の十村役を長とする十村組が行政機構として組織づけられていました。しかし時代の推移とともに開拓できる平野はなくなり、町は大きくなり、人口分布もかなり変化してきました。いままでの行政区分では十分な支配はできません。また新田開発できる土地を見つけるためには正確な地図が必要でした。そして領民支配を強化するには正確な地理の知識と中世からの農村のつながりである郷庄保を知ること大切だったのです。

この「射水郡分間絵図」は射水郡の自然と人の情報をより正確に把握し、領民支配や新田開発に利用するために作られた資料の一つといえるでしょう。



上は文政3年「射水郡一町一分下絵図」の方格線

射水市新湊博物館

〒934-0049 富山県射水市鏡宮 299

Tel:0766(83)0800 Fax:0766(83)0802

国指定重要文化財 河北郡村々組分絵図

天保11年(1840)5月 射水郡高木村 石黒藤右衛門(信之)製図

財団法人 高樹会蔵

分間(縮尺):1里1寸2分(10万8000分の1) ※複製ではさらに縮小

法量 :62.5×44.5

この「河北郡村々組分絵図」は天保11年に石黒信由の孫石黒藤右衛門信之によって描かれたものです。信由の意志を嗣いだ信之が祖父の作製した河北部の郡図をもとに改めて描いたものです。宝暦10年(1760)射水郡高木(現、射水市)に生まれた石黒信由が、加賀藩の命により加越能三か国の測量と絵図作製に取りかかったのは文政2年(1819)、信由60歳の時でした。高樹文庫(射水市新湊博物館内)には文政8年に信由が作製した「河北郡村々組分絵図」などがあります。孫の信之は加賀藩の命を受け、これら祖父の作製した郡図をもとに新しい情報を加えて、天保11年(1840)にこの「河北郡村々組分絵図」を作製しました。

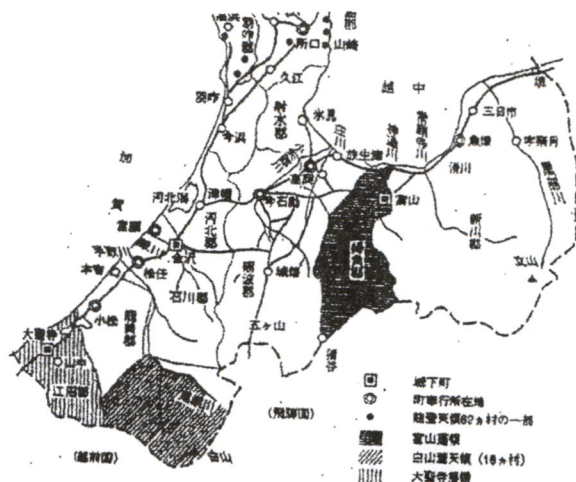
江戸時代、現在の石川・富山県には前田本家の加賀藩百万石、越中の中央南北に領地をもつ富山藩10万石、加賀国南方で越前(福井県)との国境近くに大聖寺藩7万石の、合わせて三つの前田藩がありました。

前田本家の加賀藩には加賀・越中・能登の三か国で10の郡がありました。河北郡はそのうちの一つです。

河北郡は室町時代や江戸期元禄時代までは加賀郡と呼ばれていました。石川県の中央にあって、西は日本海に面した内灘砂丘、三州最大の潟湖である河北潟があり、舟運・漁労・新田開発などで知られた地域です。

郡の東は越中砺波郡、現在の富山県の小矢部市・高岡市に接し、南は浅野川を境にして金沢城下のある石川郡と向き合っていました。浅野川対岸の金沢城下が拡大し、江戸末期には河北郡の一部が城下に繰り入れられました。北には能登の羽咋郡があり、三国山がその境界でした。

この絵図には郡内268か村が記され、赤・青・黄などの色によって村が属する金浦・小坂・五箇庄・井上(井家)・英・金津の6つの十村組が明示されています。十村組は現在の市町村にあたる行政の組織で、1組に30～70の村が属し、百姓身分の十村が支配していました。作製された天保11年(1840)の前年、この十村組の大改革が行われ、長い間続いていた行政組織がかなり変更されました。この絵図は新しい行政組織の十村組をしっかりと確認しておくことが目的の一つで作製されたものと思われます。



←「加越能近世史研究必携」より

射水市新湊博物館

〒934-0049 富山県射水市鏡宮 299

Tel:0766(83)0800 Fax:0766(83)0802

能登四郡村々組分絵図 (国指定重要文化財)

原図 作製:文政8年(1825)4月 石黒信由(藤右衛門)測量・絵図

分間(縮尺):1里1寸8分(7万2000分の1)

法量:102.5×145.2

所蔵:財団法人 高樹会

この「能登四郡村々組分絵図」は、石黒信由が測量に基づき作製した郡図をもとにした編集図です。

石黒信由(1760～1836)は、加賀藩領の越中国射水郡高木村(現・富山県射水市高木)の肝煎(庄屋)家に生まれ、和算・測量・天文暦学・航海術を修めました。享和3年(1803)8月3日、日本全図を作製するために越中を測量していた伊能忠敬を宿に訪ねた信由は、忠敬と学問談義の花を咲かせ、忠敬が携えてきた測量用具をつぶさに書き写しました。翌日忠敬が行った富山湾の海岸線測量にも、信由は同行しています。信由は、忠敬の使用していた測量器具に改良を加えた新しい道具を考案し、自らの測量に活用しました。

文政2年(1819)、信由の測量・絵図作製技術を認めた加賀藩は、信由に越中・能登・加賀三国を測量し、その絵図を製作することを命じました。

本絵図は、文政2～3年に信由が能登国を測量して得られた情報をもとに、文政8年に作製されました。絵図の精度は非常に高く、伊能忠敬の製作した絵図に比肩する正確さであり、歴史上画期的なことでした。

この絵図には、能登国4郡にある851か村が描かれ、加賀藩独自の行政組織である十村組の所属が各村ごとに明記されています。また、加賀藩が支配を委託されていた江戸幕府領(「御預所」)のほか、能登に散在する幕府旗本土方家の所領(「土方領」)の村々も描かれています。十村組は、10～50か村によって構成され、農民身分の十村(大庄屋)が支配していました。

新湊博物館は、信由以下4代の高い学問水準を伝えている「高樹文庫資料」(国指定重要文化財 3,764点、富山県指定文化財 8,506点)の寄託を受け、紹介しています。

射水市新湊博物館

〒934-0049 富山県射水市鏡宮 299

Tel:0766(83)0800 Fax:0766(83)0802

加賀国石川郡村々組分絵図 (国指定重要文化財)

原図 作製:天保9年(1838)5月

石黒信由(藤右衛門)測量 石黒信之(藤右衛門)製図

分間(縮尺):1里1寸2分(10万8000分の1)

法量:33.8cm×55.5cm

所蔵:財団法人 高樹会

この「石川郡村々組分絵図」は、江戸時代後期の測量家石黒信由(1760～1836)が測量にもとづいて作った石川郡図を、孫の石黒信之(1811～52)が編集し、石川郡を治めていた加賀藩に差し出した絵図です。

石黒信由は、加賀藩領の越中国射水郡高木村(富山県射水市高木)の村役人の家に生まれました。信由は、射水郡出身で平安時代後期を代表する算学者である三善為康(1049～1139)を理想とし、若いころから和算・測量・天文暦学・航海術を修めました。

享和3年(1803)8月3日、日本全図を作製するために越中を測量していた伊能忠敬を宿に訪ねた信由は、学問談義に花を咲かせました。信由は、忠敬の使用していた測量用磁石「ワンカラシン」に改良を加えた新しい方位磁石「軸心磁石盤」・「強盗式磁石台」を考案し、自らの測量に活用しました。

文政2年(1819)、信由の測量・絵図作製技術を認めた加賀藩は、信由に越中国(富山県)・能登国(石川県北部)・加賀国(石川県南部)の測量を命じました。信由の作った絵図の精度は非常に高く、国土地理院製作の地形図とほぼ同じ正確さです。

この絵図には、石川郡にある329か村と金沢・松任・宮腰・本吉の4町が描かれています。また、加賀藩独自の行政組織である十村組の所属がそれぞれの村ごとに記されています。十村組は、10～50か村によって構成され、農民階層の十村(大庄屋)が支配していました。

信由とその子孫が残した「石黒信由関係資料」(国指定重要文化財3764点)、「高樹文庫資料」(富山県指定文化財8506点)を所有する(財)高樹会は、射水市新湊博物館にこれらの資料を一括寄託しています。

射水市新湊博物館

〒934-0049 富山県射水市鏡宮 299

Tel:0766(83)0800 Fax:0766(83)0802



「歌仙」とは

最初の勅撰和歌集『古今集』には、漢文で書かれた「真名序」と呼ばれる序文がある。その中で、「柿本大夫」と「山辺赤人」が「並和歌仙也」と記されている。

一方、「仮名序」と呼ばれるひらがなで記された序文には、柿本人麻呂について、

かきのもとの人まろなむ、うたのひじりなりけると記されている。「真名序」に見える「和歌仙」は、「仮名序」の「うたのひじり」に対応している。

後に「六歌仙」と呼ばれる在原業平や小野小町なども、「仮名序」では、「ちかき世に、その名きこえたる人」とのみあって、「歌仙」とは呼ばれていない。

時代が下るにつれて、「六歌仙」、「三十六歌仙」などのように、「歌仙」と呼ばれる人が増えていった。



「人麻呂影供」

歌の聖・柿本人麻呂を祭る儀式のことを「人麻呂影供」と呼ぶ。六条藤家・藤原顕季によって1118年に始められたことがわかっている。夢に現れた人麻呂の肖像を描かせ、その絵に和歌を献じたことから始まり、後に、歌合や歌会に広がった。

人麻呂の肖像画や木像は、この「人麻呂影供」のためにたくさん作製された。越中周辺地域では、畠山文化の花開いた能登に数多くの人麻呂像・画像が残っている。

人麻呂像を礼拝する儀式であった影供の普及は、ますます人麻呂を神格化することにつながり、歌道を宗教的に方向づける役割も果たした。同時に、人麻呂の姿が描かれたことが契機となって、人麻呂もふくまれる「三十六歌仙絵」が多く生み出されることにもなった。

「百人一首かるた」の絵柄は、この「歌仙絵」の影響を受けて描かれている。